
ちょっとまで。

藤香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ちよつとまで。

【Nコード】

N6420L

【作者名】

藤香

【あらすじ】

ある日悪夢から目覚めたら死んでた！？ そんな経緯でいつの間
にやら異世界にやってきたちよつとばかりの異能を持つ高校生、樺
木敏雄。自分の守護天使にも会えず、状況が分からないまま周りに
振り回されつつもマイペースに頑張りぬく物語。コメディありシリ
アスあり。BL小説ですがストーリー重視、恋愛色薄め。 6 / 2
7キーワード一部変更しました。

ゼメキス01（前書き）

入れる場所に迷いましたが、こちらに差し込みました。人名がサブタイトルにつく場合はその人物視点です。基本は主人公の敏雄視点ですが、01まで出てきません。

ゼメキス01

新しい艦船の進水式を無事に終え、宿に辿りついたのは夜だった。趣味ではないが立場上しようがなくそれなりに豪華な部屋を借り、身に纏っていた派手な筆頭騎士の制服とマントをさっさと脱いで平服に着替え、それでも帯剣だけはしておく。しかし明日は陛下の名代としてヨハス王宮のサロンデル城へと伺候しなければならぬ、やはり寝酒でも呷って早く眠っておくか。

そんなことを思いながら酒を宿の亭主に頼もうかとしていた時、魔術の気配がして咄嗟に身構える。だがすぐに、それが害のないものであることがわかって力を抜いた。拳大の大きさの淡い橙色をしたゆらめく光が唐突に部屋の空間を照らし、本国の宮廷魔術師サウムの声がしてくる。

「ゼメキス様、こちらにおいででしたか。サロンデル城でお休みされているかと思い、探るのに少々時間がかかりましたぞ」

「それなりの宿でそれなりの部屋はとつてある。国の体面を潰すことはないと思うが」

ああいう派手派手しい王宮は好みではない上に、ヨハス王国との仲は現在非常に微妙だ。海軍の強化に力を入れ始めたのは当代陛下からだ、内陸の国であるローデンが軍港を持つということは海に面しているヨハス王国との連携が不可欠。だが、相手からしてみれば我が国の軍に海と陸とで挟まれているのと同じことだ、許可は出ても警戒されている雰囲気は肌で感じ取れるもの。

それに、何処の国にも火種はある、手に入れている情報からして謁見の前にその本拠地に身を置く事は今の時点では得策ではない。勿論、外交上余計な勘繰りをされぬよう、丁重に礼を尽くさねばなるまいが。

そう……何処の国にも火種はあるものだ。短くため息をついてから、光に視線を向ける。その時、部屋をノックする軽い音がした。誰何すれば副官のネレイドの声、光から視線を外し入るよう促した。

「…お酒をお持ちしたのですが…、伝令でございましたか。私は外した方が…？」

「いや、構わん。そうだろう、サウム」

他の国は違うようだが、ローデンの筆頭騎士は軍の統率者であると同時に一国の大臣であり、増して俺はただの軍人として動くこともある。どうしても生じる一部の煩雑な作業の補助をしているのがこのネレイドだ。彼は俺の動向を全て把握しているし彼に聞かせられないことは存在しない。彼には全幅と行ってよい信頼を預けている。

それを承知しているサウムからも了承の返事を得、ネレイドは手近にあったテーブルに酒器を置き、光を挟んで俺の反対側窓際の方に佇んだ。

「それでサウム。何の用だ、私への愚痴なら後で聞くが」

「と、とんでもございません、一大事なのです！」

確かに、そうでなければ態々越境してまで他国の王都の宿にまで伝令の術は使わないだろう。各国それぞれに結界は張られているのだ、王都となればそれも当然強力になる。酒どころではないかと、酒器に伸ばしかけた手を戻した。

「国王陛下が、何者かに襲われました！」

「何だと。玉体はおんたいご無事か、不心得者は捕縛したのだろうな」

思ってもみないサウムの言葉に一気にその場が緊張した。ネレイ

ドの息を飲む音が聞こえる。

「陛下は重傷ながらお命に別状はないとのこと。その、何者かなのですが……襲ったのは人型の『妖し』^{あやし}のようで、我らの術が殆ど効かないのでございます、騎士の方々もことごとく打ち倒され、後はゼメキス様に何とかしていただくほかはございません！」

「陛下はご無事なのだな？」

「典医はそのように」

「今、それはどうしている」

「我ら全員で結界を張って閉じ込めております、辛うじて持ちこたえておりますが長くは……ゼメキス様、どうかお願いいたします」

それが真実なのだろうと知れる、哀願にも似たサウムの口調。彼らが俺に望むことが容易に知れたが確認の為に再度尋ね、それが悪あがきなのだと心中自嘲した。

「私がここから戻るには急いでも四日はかかる」

「ゼメキス様」

「ゼメキス様！」

俺の返事にネレイドからは心配げな、サウムからは悲鳴のような声があがった。

「……では間に合わせぬ。私に色位の魔術師を召喚し『命令』を下せと
いうことだなサウム」

サウムからの返事はない。それこそが返事だった。それを俺が忌んでいるのを知りつつ望むということは、それだけ逼迫した状況なのだろう。そうでなくば連絡など寄越さない、そんな実直な男なのだ彼は。ローデンの宮廷魔術師は彼を含めて五人。それでギリギリ

閉じ込めている状態ならば、確かに色位しきぐいの……しかも純粹な「色」のみの魔術師でなければ妖しの排除は難しいのだろう。

一度、唇をかんだ。

それならば何故、俺は筆頭騎士などと大きな顔をしていられるのか。

しかしもう打つ手が見つからないのならば、動くしかあるまい。

「騎士のケガはどうだ」

「…気絶や打ち身、骨折など多少の怪我はございますが、こちらも全員命に別状はございません」

「そうか。わかった、『命令』を……」

「待て、ゼメキス」

了承の返事をしようとした瞬間に部屋の扉が勢いよく開けられ、平服を纏った我が国の頭痛の種が入ってきた。気を取られていたとはいえまるで気づかなかったのはこちらの落ち度、さすがに驚いたが経験上恐らく表情筋には出ない。気配を消すのが日々上達されているが、王族にそんな技術は必要ないだろうに。

「いらしていたのですか、王弟殿下」

「殿下！？ いらしているのですかっ」

「……殿下……」

俺の言葉に王弟殿下がいらしているとは思わなかったのだらうサウムの慌てた声と、殿下の行状に慣れているネレイドのため息交じりの声が重なる。

「聞いていたぞ」

「聞き耳ですか」

「野暮なことはいいつこなした。……で、お前たちは今からダルー

インに行け」

……俺より三つ年下なだけなのにいやに子供じみた表情の殿下、
王族らしからぬ所業に苦言を呈そうとしても何処吹く風といった様
子のこの御方には正直閉口させられることもしばしばだが、その唐
突な命令にはさすがに声を失った。

ゼメキス02

「……殿下、話を聞いておられたのでしょ」

発言の意図を確かめるように、王家直系によく出る金髪で縁取られたさほど身長の変わらぬ王弟ギゼル又殿下を見つめた。外見はよく似た兄弟の確執：正確には双子の兄に疎まれていた弟という二人の関係性を王宮で知らぬ人などいないからこそ、サウムに聞こえていた以上不穏になりうる言葉は謹んで貰わねば。

緊迫にも似た空気に、ネレイドが珍しくも困惑した視線を向けるが、それは黙殺することでこちらの意思を示した。聡い彼はそれ以上はよほどのことでなければ会話に口出しはしてこない。

「余計な気の回しすぎだぞゼメキス、俺は兄上の為にそう言ってるんだ。兄上を放り出して筆頭騎士に自分の命令を下し宮廷を崩壊させた、なんて歴史学者に評価されるのはゴメンだぞ。…まだ打つ手がある、だからダルーインへ行け。サウム、詳しい説明は後だ、お前はこちらの術を打ち切ってレンデイルに駐留している連中へ伝令を。最低限でいい、ゼメキスが着くまでに艦装艦装を終わらせる」

俺の視線の意図を理解したのだろう、心外だとも言うように肩を竦めた後、悪戯つこのように口角をあげて殿下は視線を向けてきた。紡ぐ言葉にはからかいが混じっているものの、その後サウムへと向けられた声は王弟そのものの威厳があるもので、短く了承の意を表した返事と共に橙色の光球は消える。魔術の気配がなくなつたのを確認すれば短く息を吐いた。

「心配性だな、お前は」

「誰のせいだと思いか」

「お前のせいだろう、お前の性格なんだから」

「打つ手とは」

飄々とした殿下の言葉にさっさと話題を切り替える。今はそんな話をしている場合ではない、幾らするべきだと思っただけはいても。

「『黒の御方』に助力を請え。その間の抑えは俺の知り合いの色位しよくいに頼めばもつ。いや、もたせてもらう」

出された提案はあまりに突拍子もなく眉を寄せた。

「『黒の御方』ですか」

「ウチが当てに出来そうなのはあそこだろう？ それに『白』や『緑』は人嫌いで隠遁中、居場所すらわからんときてるし『青』は遠すぎる」

この世界をその魔力で支えていると言われる、半ば伝説化した高位の四人の色位の魔術師。その一人『黒の御方』は遙か昔、四人の英雄と共に世界を破滅しようとした魔神ましんすらも倒したと言われ、人とは思えぬ力と美貌の持ち主だという（とはいえ、彼らの物語は吟遊詩人によってかなりの脚色がされてるだろうことは、その美辞麗句ばかりの形容からして確かだ）。確かに殿下の言われるようにローデンは黒の御方と縁のある王家だが、対価も知らない状況でそんな魔術師と契約など出来るものだろうか。

それに、ダルーインに行くということは下手をすれば数日単位で済まない話だ。その間殿下の知り合いが妖しを抑え続けられるものなのか、可能ならばよほど高位の魔術師ということになる。それならばいっそのその方に助力願った方が速やかに解決できそうなものだが。

「寧ろ、その知り合いの方に妖あやかししの排除は可能なのでは」
「契約をすれば出来るかもな。けどアイツは俺の大切なヤツだ。契約する気はないし、第一俺の株を上げるつもりはない」

浮かんだ疑問に対する答えはすぐに帰ってきた。魔術師との契約には対価が必要、そして契約という行為にその人物との関係性が変わることを好まないということだ。勿論それも事実だろうが、最後の一言に本音が透けて見えた。やはり、目に見えてローデンの宮廷を二分するようなきっかけを作りたくないということだろう。我が国は周辺の国に比べてあまりに小さい、身内で争いごとを作った際に他国に併吞へいどんされてしまえばおしまいだ。

「しかし、明日ヨハス宮廷への伺候があります」
「俺が行って適当にごまかしておく。王族が出ればあちらの角はたつまい」

『命令』を下すだけならば可能だが、ダルーインへと出向くのならばそうはいかない。そう思っ言ってみれば、妥当ではあるが意外な答えが返ってきた。

キマダ地方は、特に格式と血統を重んじる傾向がある。ローデンはその筆頭といえるだろうが、ヨハス王国もまたそうだ。筆頭騎士とはいえ、下級貴族の私よりも王弟殿下にお出ましいただけた方が確かにあちらは満足されるだろう。…問題は彼の王国の瑕疵かしだがその性質故に軍務には明るくはない殿下に直接的な接触はないか。それでも王弟殿下への護衛は万全にしておいたほうがいい、そう考えた時点で俺は殿下の案に頷きつつある自分を自覚していた。勿論、立场上それを覆すことは簡単なことではないが。

「私が『命令』を下したほうが早く済みますが」

「それ、一回きりだろ。とつとけばいいじゃないか」

あっさりど、まるで何でもないようなことのように簡単に言っただけの殿下は、恐らく自分の提案によってかかる人員も、労力も費用も大よそは予測できている。それでもその案を示してきた……それこそが俺の、いやローデンの筆頭騎士が持った一度の『命令』を行使できる術の価値。一度きり故に、その使い処が試されるこの国の切り札の一つ。

それを将来自分の為に使えど、そういう意図があるのなら話は変わってくるのだらうに。

「それに、お前それ嫌いだろゼメキス」

だが、何故聞くんだと言わんばかりに不思議そうに殿下は言いながら酒器を手取る。慌てた様子でネレイドが酒を殿下に注いでいた。いつも通りの殿下の様子に、肩の力の抜ける俺がいる。

本来ならば俺の感情など国の大事には関係ない。なのにそれを言っただけの殿下だから、相争う愚を避け宮廷で生きていく為に『奔放で我侷な王弟』として生きているこの方に、国の平穩こそが大事だと思いつつも苦言を呈さずにはいられないのだ。

「…了解しました」

しょうがない。

外交を『面倒くさい』といって憚らない殿下が自ら進んで動いてくれるのだ、その掌の上で転がるとしよう。懸案事項は幾つかあるが、妖しに関しては最悪道中でも『命令』は可能だ。することは沢山ある、まずは宿と殿下の護衛の手配を済ませなければ。

気持ちをすぐに切り替え、そのままネレイドに殿下を託し部屋を

辞して出立の準備を始めた。

多分、それは夢の中だった。

あるじゃん？ なんつーの、夢の中で「あー、これリアルっぽいけど夢だー」ってわかる感じ。

そんな、肌で夢だと分かるふわふわな感じのところにいた。

見回せば、いつも通りのクラスの風景。

あれ、俺ってこんなに学コ、好きだったっけか。どっちかって言えば、来たくなかったんだけどなー、ココ。

そんなことをぼんやり思いながら、何となくそのまま椅子に座ろうとすると、肩をぼんと叩かれた。

半分空椅子状態になっても全然平気、さすが夢。変に納得しながら相手の顔を見上げ、挨拶しようとした。

「よう、おは」

「お前、なんでいんの？」

夢の中だからなんて挨拶すんだろうかと考えながら、無難に「おはよう」と言いかけた俺の言葉を遮断するように、冷たい声がかかった。背筋がひやりと冷える。「何バカ言ってるんだよ」って軽口で返すことすら出来ない。それくらいに、それは絶対的な拒否の声。

恐る恐る、顔を上げ相手を見上げた。表情を見て打ちのめされてもそれはしょうがないと思った。いんや、寧ろ打ちのめされた方がきつといいんだ。傷は、晒さないと治らない。

俺はたった17年ぼっちだけど、そうやって生きてきたんだから。だから、顔をあげた。考えたら夢の中なんだから、そこまで必死になることなんてないんだけど。やいやい、俺にそんなこと言いやがる勇者は誰でい！ みたいな。『必殺、空威張り』の勢いで（っ

て何の技だよ一体)。
けど、そんな空威張りは長く続かなかった。
だって、そこには顔がなかったんだから。

「!!!!!!!!!!」

つまり、あれだ、昔懐かしのつぺらぼう。寧ろ都市伝説ちつく。
絶対、心臓が体感3秒くらい止まったと思う。びっくりすると悲
鳴も出ないってマジだあれ。

俺はその目鼻口どころかそれっぽい凹凸すらない顔を凝視してし
まった。何も無いというのがこれほど不気味だとは思わなかった。
悪夢ならここで覚めてくれ。あ、いや夢だったっけこれ。
なら何で覚めないんだ！

「お前、なんでいんの？」

のつぺらぼうが、言いながら一歩、近づく。その声は確かに聞き
覚えがあるのに、顔がない、それだけで誰だか分からない。寧ろこ
の状況にパニックしちまってわかんないのかもしれない。中腰で変に固まってしまった俺は逃げることも出来ず、椅子にし

たたか腰をぶつけて尻餅をついた。けど痛い、とかそんなものを感じ
てる余裕がない。

「なあ。いなきや良かったのに」

また、のつぺらぼうが一步近づいてきた。白桜がっこうの制服を着たのつ
ぺらぼうは声を知ってるから知り合いかダチか、そんな相手じゃな
かったら聞き馴染みがある言葉。

け。そんなの今更だろっつの。

威勢よく言っつてやりたいのに、俺はへっぴり腰で床を擦るように

後ろに下がるのが精いっぱい。椅子と机が後ろで嫌な不協和音がして怖気が走る。

これって、夢だけど。

夢の筈なんだけど。

やばく、ねえ？

背中をやるな感じの汗が伝ったのは気のせいにしておこう。じゃないと、情けなくも悲鳴をあげるか気絶しそうだ。あ、でも気絶したら夢から逃げられるのかな。でも違ったらシャレになんねえ。

あーもう、どうしてこんな時にあいつはひよこっとな出てこないんだよ！ 夢だけど、俺の守護天使なら護りやがれ！

「タミフル！！」

最後の綱とばかりにあいつの名前を叫ぶ。とはいえ、実際は助けてもらえるなんてさらさら思ってた。夢だって感覚は今もバリバリだし、そんなに俺は能天気な人間じゃないけど。

目の前からのっぺらぼうが消える。すごい勢いで教室が消えて、一気に世界がクリアになった。

ふわふわしてない、横になってるリアルな感覚。

……夢から、出られた？ か？

「起きたか」

状況が掴めていない、ぼんやりしていた俺の頭上から声がした。

夢の中身を反芻して思わず露骨にびびりながらも、またもや必殺空威張り（だから俺はどんな技持ちだと）で声のした方向に視線を向けて。

絶句した。

目の前にタミフルがいる。

嘘。

頭の中は夢ん時どころじゃないパニック。

なんで。なんで、なんで。

どうして、タミフルがここにいるんだ。

え、つーことは……つまり　　嘘、うそ、うっそ、だろっ……？

「　　俺、死んだの？」

ちょっと、待てよおい。

01 (後書き)

感想・誤字指摘等お待ちしております。

まで。だからちょっとまってれば俺。いきなり死んだなんて突飛すぎんだろ、ちったあ落ち着いて考えようつて。うん。

タミフルを凝視したまま、口を閉じることも忘れて俺はぐるぐると考えだす。

夢から覚めて死ぬ？ そうだよそんなのありえる筈がねえじゃん。ここんところ病気もケガもヤツらの襲来がないせいでご無沙汰だし、癒しの力使いすぎた記憶もないし、そもそも自然とセーブがかかっているから他人の治療しすぎて死ぬなんて殆どありえない線だし。

でも、タミフルがいる。

目の前に、水鏡越しじゃない、生身の俺の守護天使が。それは間違いない現実だ。死んだ後天国でしか会えないのに。天使が人界に降りてくるのはすっごい制約がかかっているんだって、ちびだった俺が会いたがっても何度も諭したんだ、間違いないねえ。

…じゃあ、やっぱり俺、死んだのか？

結局同じ結論に達した俺がタミフルを凝視していたのはどれくらいだったんだらうか。

タミフルも一言も何も言わないし、俺は衝撃の事実にも眠気も吹っ飛んでじーっと見つめていたんだけど、実際は大したことなかったのかもしれない。

ていうか、そうだよ。

「何だよどうしていきなり俺死んでるワケ？ 全然そんな兆候も雰囲気もなかった気がめっちゃすんだけど。つーかそれなら死ぬ前にどうしてこそつと俺に教えてくんないワケ？ 心構えつーもんがなんもねーじゃんよ。エロ本もDVDも動画も処理してねえし！ 夢見てたら死んでたって、どういうオチなんだよおいっ」

なんだか言ってるうちに興奮してきて、がばつと身体を起こして殆どノーブレスの勢い。そんな俺を見てタミフルはなぜか深々とため息つきやがった。な、何なんだよ腹立つな。

「……………こんな美形は一人だけかと思っただが」

？ 何言ってるやがる？

「シェイン。いるだろう、おいで」

体を後方にずらし、タミフルは木製の扉に声をかける。その動きで彼の髪が、前に説教されたときよりもずいぶんと長くなっていくのに気づいた。腰に届くほど長い。ていうか、漆黒の髪のタミフルって初めて見た気がすんだけどな。水鏡越しだったから何とも言えねえけど、タミフルの髪って銀色じゃなかったっけ。カッコ良く言えば白銀ってどうか。こんなに真っ黒なら何でそんな色と間違えたんだろ…それとも染めたとか？

「 ライル」

暫くして扉を開けて入ってきた金髪の少年は、随分とばつの悪い顔をしていた。気配を全く感じなかったんで驚いたんだけど、そもそも人と違うんだから気配もわからないもんかも、と思いつつ直す。

「安心しろ、この御仁の世話を任せる。…罰にはちようどいいだろう？」

反論しようとした金髪少年の頬がうつすらと染まった。胸がまったいらだから少年だとは思うが、なんだか少女みたいな可憐さだな

おい。顔はどつちでもいいような白人ぽい美形だし。……って、いやいやそんなツッコミいらんだろ。何だこの置いてけぼりな感じ。話が全く見えないぞ。

「タミフル！」

そのまま少年を部屋に入らせて代わりに出て行くあいつの名前を叫ぶ。

おい、お前俺の守護天使だろうが！

けれど、そのままローブを翻してタミフルは出て行ってしまった。

扉をそのまままじつと見つめていた少年は、その後こつちを向いて軽い足音と共にやってきた。タミフルみたいなローブ姿じゃなく男の子だってわかる程度には体の線がわかるカッコをして、肩につくくらいまで伸びてるふわふわの豪華な金髪を不思議そうに揺らす。あ、ちよつと撫でてえかも。

「あんまり叫ぶと喉を痛めますよ。ライル、面倒くさいとすぐ境界はって聞かないようにしますから無駄ですし」

さりげに人のする事無駄とか言うな。表情を見れば全く悪気がなさそうに見えるだけにこの怒りをどこにぶつけていいかわからなくなるだろうが。

「体は特に怪我もないみたいですけど…どうやってこの森に入ったんですか？ 二重境界がないとはいえ、ダルーインに入ってくるのも常人には難しいはずなんですけど。はい、湯冷ましどうぞぞ」

無然としたまま上体を起こしていた俺に、少年は言いながらテーブルの上から両手のひらで支えるほど大きな器を寄越した。…イメージ的にはあれだ、抹茶碗。中にはちよつとだけ水つぽいものが入ってる。さつき叫んだせいか寝起きのせいか、喉が乾いてきた俺は遠慮なくそれを一気に飲み干す。生ぬるい温度が喉を通つていく感覚がちよつとだけ気持ち悪い。

「ごちそうさま。で、なに？」

……しかし、喉乾いたりなんだり死んだ割にすげえ生身つぽいなあ、俺。そう思いながらその器を少年に返して尋ねる。正直、あんまり少年の話を聞いてなかったからちよい申し訳ねえなあ。大体、金髪少年の声が何かこう、音楽的というかやたら滑らかで『言葉』つつう感覚が乏しいからかもしんねえな。俺死んだばっかでパニクってたし。でもまあ、そういう人間もいっぱいいるだろうから対処には困らないだろう。うん。

「……貴方は、誰ですか？」

盛大にため息をついた後に、少年は俺に言わずもがなのことを聞いてきた。少年、タミフルと親しそうな感じはしたのに俺のこと知らないんだ。まあ、でもあいつの性格上それもありうるか。

「タミフルに聞いてねえの？ 白桜の2年、樺木敏雄。あいつが守護してる『いとし子』だけど」

「先ほどから不思議に思っていたのですが、タミフルとはどなたですか？」

………は？

本当に不思議そうな、丁寧な金髪少年の言葉。だけどその内容の

齟齬に、目を幾度か瞬かせる。

「さっき、あんたも喋ってたじゃん」

「……彼はライル。ダルーインに住まう魔術師です」

嘘混じりけないのが分かる、力みもなく当然のように話すその言葉の滑らかさにまた意味を取り落としそうになる。
が。

「……ちょっとまで。」

誰、だって？

ライル01

銀色の光に包まれた少年が自室の宙空から現れたのは夜半過ぎだった。

「じゃあ、頼む」

あっさりと言つてのけた目の前で浮いている私と同じ顔をした使いは、光に包まれて胎児のように身体を丸めている少年をいとおしげに見つめてから燐光を残して姿を消した。魔術とは違うその波動の型には興味が沸くのだが：だからと言つて、とんだ厄介者を預かりたかつたかといえは全くの否だ。

やれやれ、と嘆息と共にまだ浮いたままの少年を自分のベッドに寝かせることにした。どういった仕組みなのか銀の燐光は彼の身体の下に支えるように両腕を伸ばすと急に消えうせ、一気に荷重に耐える羽目に陥り慌ててベッドへと横たえる。生憎腕力が有り余つてゐるワケでもなく、加えて予想していなかった事態に寝させるのが精一杯でかなり雑な動作になってしまったが、どうやら少年の眠りは相当深いらしく起き出す様子は見せなかった。それが彼のもともとの性質なのか、使いによるものなのか：そこまでは私の与り知るところではない。

ひよんなことから預かることになってしまった少年を見下ろす。多少は瘦躯にも見えるが、全体的には年代に相応しいのびやかな体つきを、この世界とは違う襟の詰まった濃灰色の礼服のようなもので包んでいる。髪の色はくすんだ茶色だが大分痛んでいるようにも見え、肌の色や顔立ちはこの大陸のものとは明らかに違う、異世界の少年。

この少年が、か……そう考えると多少の感慨がわなくもないが、

信じられない気持ちのほうが強い。シャイアの勘違いだったのではないかと、彼女が間違えたことなどなかったにも関わらずそう思わずにはいられない。複雑な気持ちのまま少年に毛布をかける。この時期は朝方が冷え込む、風邪を引かれても厄介だ。私は今後行うだろう彼の地への結界でも術室で試してみるとしよう。

翌朝、早めに食事をとったが少年が起きてくる気配はなかった。私の部屋で人の気配を感じたのだろう、シェインは物言いたげな視線でそわそわと私を見つめている。その視線でどういった誤解をしているか瞬時にわかってしまい、内心ため息をつきながら髪を手櫛で梳いた。色事を外から持ち込む気力が今の私にあるワケがないのに、この子がそれに気づいていないことに目を薄く細め、見え透いた罫を仕掛けることにした。

「シェイン、私の部屋に客人がいる。近づかないように」
「……は、はい」

その、何処かかかっていた我が家の姫君を思わせる可憐とも言える顔が瞬時に曇った。才は私を凌ぐかもしれないシェインだが、魔術師というにはあまりにも感情表現が素直すぎるのが欠点だ。それを美德ととる人間のほうが多いのかもしれないが、魔術師の欠陥としては致命的と言える。

彼のその表情を確認してから、私は部屋に向かった。そろそろ、少年の様子を確認しなければいけないだろう。

自室に戻ってみれば、少年が怯えたように身体を縮こまらせていた。どうやら悪夢に魘されているようだ。

世話がやける。

「タミフル!!」

だが、そう必死に使いの名を呼ぶ少年の、異世界からの自覚なき訪問者という身の上を思えば多少は同情すべき点もあるかと、短く悪夢を払う呪文を唱えた。それが覚醒の引き金にもなったか、僅かに身動いていた少年の身体から力が抜け、やがて瞼が震えて目が開く。だが状況を把握できそうもないぼんやりとした表情に、「起きたか」と声をかけてみれば何を反芻したのかそれとも寝起きだったせいか、露骨に怯えたような仕草を見せ、しかしその後すぐにこちらを仰ぎ見るのはなかなか気が強い。そう思ったが私を見て口を開け放したままの仕草はその印象も否定する。

「俺、死んだの？」

……なんでそういう反応になるのか、理解不能だった。

「何だよどうしていきなり俺死んでるワケ？ 全然そんな兆候も雰囲気もなかった気がめっちゃすんだけど。つーかそれなら死ぬ前にどうしてこそつと俺に教えてくれないワケ？ 心構えっつーもんがなんもねーじゃんよ。エロ本もDVDも動画も処理してねえし！ 夢見てたら死んでたって、どういふオチなんだよおいっ」

寝起きにも関わらずよくそこまで喋れるものだ、と感心するほどに少年は興奮しながら捲くし立てていた。勿論、言っていることの半分も理解はしていないしするつもりもないが、私を使いと勘違いしているからこそなのだろうということはその乱暴とも言える言葉の端々に知っている者相手故の甘えが滲み出ていたから分かる。

「……こんな美形は一人だけかと思っただが」

やはり、あの使いの容姿は私に似せて変身したのではなく元々似ているということなのだろう、それが確認できたのは収穫だった。しかし、如何せん少年は煩すぎる。状況を分かっているにせよも自分にあるのだろうかそれを分からせるのは面倒だ。それに、私よりも適任の者がいるのだから使わない手はない。

「シェイン。いるだろう、おいで」

体を後方にずらして扉の裏に居るだろう彼に声をかけた。ああいう明け透けな言い方をすれば、幾ら制する言葉を使っても彼がここに来ずにはいられないことくらい承知の上、扉の前に在る気配は隠そうと努力はしているようだが私からすればまだまだ未熟だ。

「
ライル」

罰が怖いのか入ってくるまで間があったシェインは、随分とバツの悪い顔をしていた。怖いというより恥じ入っているのだろう、その健やかな精神は私がとうに失ってしまったものだ。この子もいつか無くすのだろうか、そうあるべきが当然なのにそれを何処か惜しむ自分があることを私は自覚していた。

「安心しろ、この御仁の世話を任せる。…罰にはちょうどいいだろうっ」

余計な心配をして『近づくな』という私の指示を破ったのだから。それに、この少年が心配だというならば、自分で見張っていればいい。私の意図が分かったのかシェインの頬がうす赤く染まるのを視界に入れつつ、部屋を出て行く。もうこの部屋で今のところ私にす

ることはない。

「タミフル！」

背中に私を呼んでいるであろう少年の叫び声がして、面倒で音を遮る簡易結界の呪文を唱える。誤解ならシェインがすぐに解くだろう。私は彼を守護する存在ではない。

シャイア。

彼が『私を毀す存在』だというのは、本当ですか。

今は居ない人にそう尋ねても、返ってくる声は当然なかった。

ひっじょーに、認めたくないんだけど。

どうやら、俺は異世界とかいうものに飛んでいる、らしい。

……………夢オチ、とかそういうのねえかなあ……。

お互いの、一人の人物に対する認識がずれている。それに気づいた金髪少年の対応は早かった。部屋の片隅にあったんだか丸めてあるのを埃を払った後に木の机に広げる。俺は少年に手招きされてそれを覗き込む前に、何となく衝動に任せて少年の頭を撫でてみた。おお、まさに猫っ毛。ふわふわのほわほわ。どんなシャンプー使ってたんだおい。

「あの？」

「はいはい、で、なに。……………蝶々？」

不審そうな顔をした少年にごまかすようににっこりと笑顔を向け、話を変える。俺ってこんなワケわからん状況でも図太いな。うん、良きことかなヨキコトカナ。そう思いながら少年の広げたものを見ると、羊皮紙っぽい古びた紙の上に、蝶々が翅を広げたらしきものが描いてある。でもデフォルメされてるってよりは、なんかあれっぼい…何だっけ、ロールシャッハテスト？

「シュノーゲン大陸の地図です」

「……………シュノーケルって、あの、水中を泳ぐのに使うヤツ？」

「……………」

お互いの齟齬をかみ合わせるのに、どれだけ時間がかかって二人してくたびれきったかっていうのは、まあ、この際男らしく言わないでおこう。

そんなもって、結局分かったのは、ここは俺が全くもって知らない異世界ってヤツで、タミフルだと思ってたのは、金髪少年シェイン曰くこの世界のナンバー1魔術師のライル、ってヤツらしい。：らしいっていうのは、この数日この家に厄介になっても顔を見たのはあの最初の日だけだから。何だよ、そんなにシャイなのかってーの。

何にもこの世界の常識がない俺を心配してか見かねてか、俺の身の回りの世話とにわか教師はシェインがやってくれていた。170ちよつきりしかない俺より更に頭一つ小さいのにくると小回りがきく勤労少年を見習って、今日はやることもないので一緒に洗濯物を干してみる。：洗濯機って便利だったんだな。寮じゃ並ぶのが面倒臭いばかりでちっともそんなこと思わなかったけど。

「あのさ、俺ってライルに警戒されてる？」

「：というよりライルは、魔術中心の生活をしてますから。：トシオが元の世界に戻れるよう、考えてくださってるとは思ってますけど」

「その割りに、俺への質問が皆無ってどうよ」

二人でやれば洗濯干しもあつという間。この家は森の中心部の開けた草原の上に立ってて、この時期は晴天が続くらしい。三人分だがこの風の通り具合ではすぐに乾くだろう。森の匂いを胸いっぱいにかいで、空を仰ぐ。白桜はくおうもそうだったけど、自然の光とか空気は

やっぱり無条件に気持ちいい。いいが、このまんまでいいのかちょっと心配だよなあ。何となく世話になっちまってるけど、ここで骨を埋めるワケにもいかねえし。こういう時こそタミフルに相談してえのに、シエインに水晶玉とか水鏡とか借りてみたけどちつとも繋がりやしねえ。ちえ、タミフルの役立たず。

ライルにしたってさ、どうやってここに来たんだ、とか直前に何があったんだ、とかそもそも本当に異世界から来たのか、とか色々尋問とまではいなくても尋ねるのが普通じゃん？

なんて、タミフルとライルへの気持ちシエインへのぼやきに姿を変えて口から出てた。

「…ひよつとすると、トシオに聞かなくてもある程度予測がついたのかもしれないね。かあ、…『黒の方』から何か聞いたことがあるのかも」

俺の不満に、洗濯籠を抱えながら美少女と見まごうばかりの美少年は首を傾げる。それにあわせほわほわと揺れる豪華な金髪。将来が楽しみというか道を踏み外す連中を大量発生させそうで恐ろしいというか。俺だって美少女だったら告白とかしちやって手えつけちゃいそうだけど…って、この状況でそんな度胸ねえけどさ。

つつか、ん？

「黒の方？」

何だそりゃ。

「あー、えーと……1000年前後生きた魔術師です。『知識の泉』という異称も持たれた方で知らないことはない、と言われたとか」

「へー………って、1000年!？」

常識知らずの俺に説明するためか言いよんだシェインの後の台詞にぶつ飛んだ。1000年生きたって、マジかオイ！俺の世界じゃ1000年生きるのにも一苦労だぞ『魔』のせいだ。

「マジかよ…こつちの世界って、みんなそんな長生きなのか？ エルフみたいだな」

「えるふ？ …大体一般の人は5〜60年生きれば長生きだと思えますよ。王や貴族でも1000年生きる人は稀ですね。魔術師だけが魔力が強ければ強いほど長生きします」

知らない単語に首を傾げたシェインだが、俺の「続けて目線」に気づいたのかそのまま説明してくれた。こんな辺鄙な場所に住んでいる割にこの美少年の知識は驚くほど深い。逆の立場になったとして、俺がシェインに俺の世界の説明が出来るかと言えば…ちよつと出来そうにねえな。この間だって「は？ テンシ？」とかワケがわからない顔されたし。天使ってこの世界にはいねえんかな、俺の世界だと人間一人に守護天使一人就くんだけだ。でもまあ、寿命自体は普通は俺らと変わらないんだ。なるほど。

「じゃあ、その『黒の方』の所に行けば俺は帰れるかもってことか」
ちよつと光明が見えてきたかも。少しばかり軽い気持ちになって立ち上がる俺の視界に、うつむくシェインの姿が入った。

「…僕の説明が悪くてすみません…『黒の方』は、もう随分前に亡くなってます」

絶句した。そしてそんな自分に、俺は自分の世界に戻りたかったんだと遅ればせながら自覚する。言葉も通じて、飯がうまくて、ライルはともかくシェインが親切だったから実際のところそう切実に

は思っでなかつた。

いいや。俺は異世界にいるのだということ、本当にはわかつてなかつた。タミフルと繋がらないこと自体が、俺が異世界にいる紛れもない証明なのに、鈍い俺は、シェインの泣きそうな顔にそれを思い知らされる。

「トシオ、すみません、ごめんなさい…っ」

謝り続けるシェイン。帰る手段がなくなったワケじゃないんだから、そんなに謝らないでいいのに。そう言おうとしても、気づいた事実に声が出なかつた。シェインが謝れば謝るほど、「お前は帰れないんだ」と言われているようで、余計に声が詰まつた。

「何をしている」

固まつてしまった俺と謝り続けるシェインにそんな声が降ってきたのは、その時だつた。

顔が強ばった自覚はあった。声のした方を振り向くしぐさなんざまるで油切れ寸前のロボット。いや、別に疚しいことなんざないけど、シェインとのぎこちなさとか、自覚しちまったいやんなこととか、そんなこんなでキャパの少ない俺には飽和状態だったんだ。

「来い、カバキ」

それでも、振り向いてやっぱり声をかけたのがライルだと確認すると、体ごと向き直った。：最初のときも思ったけど、なんつーか、こっ、断定的な俺様系って感じだよなあ。ま、それだけ地位とか能力だとかあるんだろ。シェインもライルのこと尊敬してるっばいし。泣きそうな顔から、俺とライルを交互に見て困ったような表情になったシェイン。大丈夫だって、とそのふわふわの金髪を撫でる。困らせてごめんな、の意味も込めて。

「カバキ」

「ほーい、ほいほいっ」

怒ったワケでもないんだろうが、もう一度俺を呼ぶライルの声に殊更軽く答えてシェインから手を離れた。一度笑いかけて、それから少し離れたライルへと駆けていく。あの気のいい少年がこれ以上困った顔をしないように。髪の毛触り心地良かったし。

そんな余裕がちょっとは出たのもあまりにマイペースなライルのせい（っていうかおかげ？）かなって、ちっただけ思った。

最早勝手知つたる石造りと木造がミックスしてる家の中に戻る。

ここは島らしいんだけど、俺はこの家を囲む森の中からまだ出たこととはない。別に理由はなくて、シエインと勉強とか家事してたら結構時間がたつちまつたからってだけなんだけど。

この家はこの島に一軒だけ建ってるらしいけど、森の中の一軒家ってイメージからしたら結構でかいんだ。三階くらいあるし、今は俺が居候してるから三人暮らしだけど、それでも使つてない部屋とかいっぱいあつて、正直シエイン一人で掃除するのも大変なんじゃないかなあ。昨日は掃除手伝ったけど、ここ10人以上軽く住めるぜ？ 今いるダイニング兼用の居間のテーブルもばかでかいし。

「それで、何？」

「行く先が決まった」

二人きりなのは…っていうか顔を合わせるのが寝起きのあの時以來で、シエイン相手と違つてどことなく空気を持てあます。とりあえず、と椅子を引きながら尋ねた俺に、淡々と相手は答えた。

は？

「行く先つて、何が？ 誰が？」

「お前がこれから行くところだ。海路と陸路を併せても半月以上はかかる、準備しておけ」

意味が分からなくて、頭の中が麻痺したようだった。固まっちゃまった俺とライルの視線が合う。段差がないとこにいても目線がわずかに上にあるライルは、俺の出した頓狂な声にも見下ろす目の色を変えない。タミフルとは違う、濃い青の瞳。そこにあるのは、拒否？

何だそれ。

「…俺、ここにいていいんじゃないかったの」

「私はそんなことを言った覚えはないが」

「そりゃ、そうだけど…っていうか、今の今まで顔すら合わせなかったじゃねえか！」

声が高くなつてた俺に、ライルは視線を逸らしてため息をついた。何だよ、男ならばつきり言いやがれ。

「うるさいのはごめんだ」

！！！！

「悪かったな！俺だってお前の家で膝抱えて隅っこで居候しなくてすんでせいせいするぜ、短い間だったがあばよ！」

頭に血が昇ったら後先考えないのが俺の欠点だつて、タミフルには小さい頃から水鏡越しに説教されてきた。それで失敗もいっぱいしてきたし、フラれたのだから数えたくないくらい（まあ、ガキん時の話だけどさっ）。それだつて、まだまだ17、保身で行動したくなんかねえつての。

だからこの時も自分の衝動の赴くまま、俺は椅子を蹴倒して家を飛び出し、森にダッシュしたんだ。

……………迷った。

時計も携帯も持たずにこの世界にやってきた俺にはあれからどれくらいたったのか、腹具合ぐらいでしかわかんねえ。そもそも、昼飯食つてねえし。木々の隙間から光が零れてるからまだ明るいのは分かるが、あの家を飛び出したのが午前中だったんだから、今の目

安にはならないだろうし。

「あー、疲れたし腹減ったっ」

いつもながら無様な有様に、わざと大声で喚いてから手近な木に寄りかかって、そのままずりずりと凭れた。今着てる借り物の服はシャツの上に長めのベスト。ウエストを細い帯で締めてパンツにブーツっていかにも中世コスプレって感じ。パンツはジーンズなんかに比べたらやっぱり薄手で、木の温もりと地面の冷たさがリアルに分かる。

…まあ、そうだよなあって、冷静に考えれば分かる。シエインにしたって、『戻る方法を探してるのかも』って言うってただけで、俺自身はライルに確認もしてなかったんだしさ。つまり俺が逆切れしちまっただけで、ライルに悪気はなかったのかもしれない。……とは、思いたくねえんだけど。何だよチクシヨウ、タミフルとそっくりなクセしてあんな態度なんだよ。タミフルだってお世辞にも善良な一般の天使とは言いがたいけど、もうちつと俺に…

「…　　つて、何だよ俺のバカあほとんちきっ」

がば、と木から身を起こした。ちつとばかり尻が痛かったが知ったことじゃねえ。

タミフルは優しくかったのにつて、ライルが優しくねえから拗ねてたのか俺は！？　つーか、たまたま顔がそっくりなだけでライルはタミフルじゃねえのに、何恥ずかしいこと考えてんだよつ。

恥ずかしさと情けなさに、どうせ一人だと安心しきってうがああつ、と頭を抱えて悶絶していた俺はその気配に全く気づかなかった。

いきなり肩を掴まれて息を呑む。条件反射で体が強ばった。

ちよっ、とまった……っつ！

一瞬のことだった。

低い呻き声と一緒に吹き飛ばされ、木にぶつかるいかにも痛そうな音が辺りに響く。

「うわあっ、ごめんなさいすみませんっ」

銀の燐光を纏いながら、慌てふためいて吹っ飛んだ誰かのところに駆け寄る俺。やばい、こんなのタミフルにばれたらまた怒られる。水鏡の前で正座させられて説教の嵐っ。

……………あー…ここ、異世界なんだっけ。

思い出して若干力の抜けた俺は、いやいやそういう問題じゃない、と頭を振って吹っ飛ばしてしまった相手に近づき誰なのか観察した（だってやばそうな相手だったら逃げないとじゃねえ？）。それに、俺の『壁』の力はかなり強力だからいざとなったら治療しないと。
通草あけびほどじゃないが、俺にも出来なくはないし。

そんなことを思いながら相手のすぐそばまで近づいたら、咄嗟に受身をとったんだろうな、声を漏らさず草の上に手をつきながら身体を起こしてる短い黒髪の男と目が合った。

「……………誰？ あ、じゃなくて本当すみません怪我ないっすか？」

立ち上がり、無言で服…っっていうかマントを払って鎧の埃を落とすしてる男の様子に、大きな怪我がなさそうだと安心しながら俺は一度頭を下げた。条件反射だったから『壁』も結構強力なもんだっただと思うのに、案外平気そうな顔をしてる。受身がうまいんだなって思いながら、出来るだけそっと全身を眺めてみた。

耳が見えるほど短い髪、整っちゃいるが結ばれた唇と眉間の皺からしてなんか固そうな感じの顔。髪も瞳も黒だけど、顔立ちはやっぱり外人だ（つつか、俺がここじゃ確実にガイジンなんだろうけど）。背はむっっちゃ高いな、俺がここまで見上げるってことは190くらいあってもおかしくねえ。カツコからして武人って感じ…とと、肝心なところ、あ、やっぱ帯剣してるか。でもまあ、こんな埃落としてるくらいだ、襲ってきたわけじゃないだろ。そう思って安心すると俺は体の回りを隙間なく包んでいた銀の燐光、『壁』を消した。

「迎えに来た」

身繕いは済んだのか、男は俺を見下ろしながら…え、今なんつった？

「迎え？」

「ああ。時間がない、行くぞ」

「へっ？」

言っておくが、俺は特別華奢でも小柄でもない、ごく一般的な肉中背の高校生男子だ。体重だつて60キロ超えてる。なのにひょい、くらいの気軽さで肩に抱え上げられた。

（なんだーっ俺は米俵かつ！）

あまりの衝撃に口を開けなかった俺が了承したと勘違いしたのか、男はそのままスタスタと歩き出す。高所恐怖症のケがある俺は下手に暴れて落とされるのが怖くて、『壁』を出したとしたって怖いのは怖いんだっ）、結局ライルの家までその格好でいたのだった。

「…あの、これ、荷物です」

それからはあつという間だった。

馬に乗ったことがないという俺の言葉に呆れたような目線を寄越した男と一緒の馬に無言で乗せられ、この展開に何からどう聞いていいのやらさっぱりになっちまって、つまりは何にも状況が分かってない俺に、寂しそうな顔をしたシェインが布袋を差し出しながら声をかけてきた。受け取ってあけてみれば、中にはシェイン手製だるうパンと数日分の衣服、それと元の世界から来た時に着ていた制服。

「あー、ありがとな。シェインのパン、うまいし好き」

俺は馬上からシェインを見下ろしながら、「こつちこつち」と更に近づくと手招きした。すると素直なシェインは何の疑いもなく馬のすぐ隣まで来た。そんなに純粹で大丈夫なのかお兄ちゃんは心配だぜ、なんて一人ごちつつ馬上からふわふわの金髪をかき乱すように遠慮なくくしゃくしゃと混ぜる。

「わっ、トシオっ」

「わわわわっ」

……かき混ぜるのに集中しすぎて馬から落ちるところだった。後ろにいた男が咄嗟に支えてくれたから平気だったけど、一気に間近に見えた地面に心臓がどきどきする。俺、こんな調子で旅なんぞ大丈夫なんだろうか。後ろで男はため息ついてるし。何だよ、文句があるなら直接言いやがれコンチクショウ。

「だ、大丈夫ですかトシオ？」

「だ、だーいじょーぶだーいじょーぶ」

安心させるつもりが心配されてどうするよ俺。内心自分に乾いた笑い声をあげながらも、俺は落ち着くよう自分の胸を手で撫でながらシェインに頷く。一度深呼吸しよう。すーはーすーはー。人つつー字でも手のひらに書いてみるか、これで落ち着いたためしねえんだけど。

「トシオ」

さっきの嫌がらせに後ろの男に全体重を預け、手綱も離して本気で手のひらに文字を書こうとした俺だったがシェインの声に我に返った。目の前のことに集中しすぎちまうのは俺の悪いクセ。っていうか、悪いクセいくつあるんだ俺。

「元気でな、シェイン。いろいろありがとう」

ほんの数日前のことなのに、なぜか懐かしく思えてしまう。くるくるとよく働くシェインは、手間が増えただるうに文句一つ言わず表情にも出さず俺の世話をしてくれてこの世界のことを色々教えてくれた。自分が異世界に来た、なんてことをすんなりと納得出来てさほど寂しくなかったのもシェインのおかげだろう。お互いの知識のすり合わせにぐったりしたのも、今となっては笑い話だ。

「シェインに逢えて良かった」

だから、最後は笑ってくれや。元が美少年なだけに悲しい顔も寂しい顔も絵にはなるけど、どうせなら笑顔が見たいじゃんか。そう続けた俺に、「しょうがないですね」なんてちよつとだけ憎まれ口を叩いた後、シェインは精一杯の笑顔を見せてくれた。

「お元気で」

「シェインも、ライルの世話で過労死すんなよ？」

「はい、勿論」

結局、ロクな説明なしで顔も見せない（俺が逃げたせいだなんて絶対認めねえぞ）薄情魔術師の名前を出せばシェインの顔が自然に綻ぶ。あらまあ、本当にあの根性悪のこと尊敬してるんだなこりゃ。ちよこつと呆れた俺の背中の方から「行くぞ」と低い声がして、こげ茶色の皮手袋が手綱を取った。どうしてこういきなりなんだこいつは。つーかライルも俺様系だから寧ろシェインが珍しいのかこの世界では。そう思いながらも俺はシェインに手を振って、歩き出した馬の振動に若干びくつきながらも、もらった袋をしっかりと抱え直した。

シェインの日記

5月2日 快晴

母様、今日はびっくりすることがありました。ライルの部屋にお客様が来ているらしくて、母様には笑われてしまうかもしれませんが、どんな人でライルとどういう関係なんだろうと、食事を片付けた後どうしても心配になって、ついこう、立ち聞きしてしまったんです。ライルからは「近寄るな」って言われましたし、そういう行為はどうかと思ったんですけど、自分の欲には勝てませんでした（情けないですけど）。

でも、聞いてください母様。お客様は、ライルの恋人とか情人ではなくて、とんでもない人だったんです。

異世界の方だったんです！

母様、異世界の方って見たことありますか？ 思ったより普通なんですよ、腕も足も二本だし、目と耳が二つで鼻と口が一つ。基本的な身体の部分は僕と一緒にでした。言葉も通じるし。確かに、肌や髪の色とか顔立ちは違いますけど、僕はそもそも島（タルイン）から出たことがないのでそれがどれだけの差異なのかはちょっとはつきりわからなかったです。ライルにそれを言ったら『暫く旅にでも出たらどうだ』なんて体よく追い出されてしまいそうでもないんですけど。僕は、ライルの側から絶対離れないって、決めてるんですから。母様が聞いたら大笑いしてしまうかもしれませんが、僕の掛け値なしの本音です。

それで、僕は立ち聞きしていた罰としてその異世界の方　　力バクトシオさん　　のお世話をすることになりました（どちらにしても僕がすることになってたんじゃないかなあ、とは思ってます

けど)。トシオは（堅苦しいのはやだつて、さんづけを拒否されたんですよ）最初自分がシュノーゲンに来たつてことが分からなくて、…ついでに言うトライルが何も言ってくれないものだから、僕もトシオが異世界の人だつてその時は分からなくて、お互いにその事実を認識するのにすごく時間がかかりました。…最初に一言言つてくれればいいのに、やっぱりライルは意地悪だと思います。大好きですけど。

そんな感じで疲れはしましたけど、トシオはすごくいい人に見えました。なんていうのかな、雰囲気とか、そういう曖昧な感じですねですけど。でも僕の勘は当たるので、素直に信じようと思います。…そんな感じかな。おやすみなさい、母様。

5月6日 晴のち曇

母様、ここ数日風がざわざわとしています。トシオが来たのとか関係があるんでしょうか。言葉には出来ないんですけど、身体はどこか奥が、ひどく落ち着かない感じがするんです。ライルに言つてみたら、「いずれ分かる」と一言で終わつてしまいました。でもその後に頭を撫でてくれたから、すごく的外れなことを言ったのでは、ないみたいです。…母様も、ライルにそんな風に接してたのかなあつて、こんな時は思います。もどかしくて、力が足りないのが悔しくて、でも構つてもらえたのが嬉しい、そんな気持ち。ひよつとしてライルも、持ってたのかな。

トシオといえば、なんか割とすんなり馴染んでくれています。昨日は掃除、今日は一緒に洗濯物を干してくれました。その時にしみじみ「洗濯つて大変なんだなあ」つて言つてましたけど…トシオつて、洗濯したことないのかな？ そんな人っているのかな。

母様、告白します。

このまま何事も無い日記、にしてしまうには僕がどうしても苦し

くて、だから僕の懺悔にしか過ぎないんです。母様からしたら「そんな些細なことです」って笑うかもしれません。けど、僕は母様の息子であることを誇りに思ってます。ライルにはひよっとしたら一生振り向いてもらえないかもしれないけど、それでも母様の息子であることを厭うたことは一度もありません。

でも、今日僕は、トシオに母様のことをまるで僕とは関係のない、赤の他人のように話してしまいました。その上、その内容にトシオに変な期待までさせてしまったんです。母様は、もういないのに。

母様。僕は、自分の気持ちに誇りを持ってない汚い子供です。ライルに呼ばれ際笑いかけてくれたトシオの方が、僕の半分も生きてないのによっぽど大人でした。

5月6日 二度目に付き省略

母様、本当は一日に二度も日記をつけるつもりはなかったんですけど、つい筆をとってしまいました。

トシオが、行ってしまったんです。ローデンへです。母様にも馴染みが深い国ですね、今でも常^{ラ・グア・ミ・ソ}つ国でプリシラ様と仲睦まじくしてらっしゃいますか。

また僕には何も知らされていなくて、トシオが家を飛び出したのに入れ違いにローデンの筆頭騎士の方がやってきたのを見てびっくりしたんです。ライルも、島の結界をまた緩めたならそう言うてくれればいいのに……なんて言ったら「気づかないお前の鈍さはどうかしている」とか嫌味言われてしまっただろうなあ。

それで、騎士の方はトシオがいないと聞いたらすぐに追っかけていきました。確か、ゼメクス・サノス・シャフバルトさん。僕が見上げると首が痛くなるほど大きいんですけど、結構せっかちな人みたいです。トシオを肩で担いで戻ってきたときはさすがにびっくりしました。騎士って身体鍛えてるんですね、魔法なしで人を持ち上

げられるなんて僕には考えられません。なんかそれがやっつと実感できた感じがします。

ライルに荷物を準備するようにと言われて、夕飯にと作っておいたパンとトシオが大事にした服（セイフクって言うんですよ）、それと当座の着替えを布袋に入れて渡しました。兄様たちの古着ですけど、洗濯はしてあるし、もう使わないから問題ないだろうと思つて。

母様、ライルには前から散々言われてるんですけど、僕やっぱり顔に全部出ちゃうみたいです。トシオにまで見抜かれて…励まされちゃいました。その時に馬から落ちちゃいそうなところが、トシオらしいなあって思つたんですけど。

でも「会えて良かった」って言われて、僕、本当に嬉しかった。

ライルや、兄様姉様たちとは違う、普通の友達が出来た気がしてだから、僕トシオが困つてたら力になりたい。母様やライルに比べることも出来ないくらい魔術師としては未熟な僕だけど、トシオに逢えたらそう言いたいんです。

………ひよつとしたら、ライルは、僕にそういう出会いを積み重ねて欲しいのかもしれない。保護者だから。だけど、僕は

母様、僕、混乱してるのかもしれない。トシオもいなくなつてしまつたし、思つたより動揺してるのかも。今日はもう寝ます、おやすみなさい。

ライル02

島の結界が緩んだのに気づいた。

その術の構成から、それが誰のものか瞬時に知れてそのままにしておく。我が元を離れて久しいのに我ながら甘いことだと思いはするが、情とはそんなものなのだろう。

気にせずに先ほど飛び出していったカバキの『気』の変化を思い返し、作りかけの術式に調整を入れる。姿形は確かに我らと一緒なのだが、やはり自然に放出している『気』が違う。彼が持っている力もまた、恐らく私には未知数のものなのだろう。そして、今ローデンで眠る彼の『災い』もまた。

そんな思いで徐々に結界術の本格的な改良を試みていた私の背後で、伝声でんせいの気配がして振り向く。拳大の淡い橙の光に浮かんでいる印影は明らかに島の結界に介入したあれの物。

「どうした、言い訳か」

「返す言葉がございません。ですが、どうかローデンの為に尽力いただきたく…」

「断る」

言い淀んでいるのだろう、何も言わずに暫く揺らめいていた光に痺れをきらして先に言えば、慌てたような声が虫のいい言葉を繋げようとするのできっぱりと断じた。島の結界をそのままにしておいた以上断られるとは予想していなかったのだろう、それ以上の言葉は返ってこない。

「ですが父様、他の何処でもないローデンの危機なのですよ!？」

「お前に父親呼ばわりされる理由はない。もう何十年も前に縁は切つてあるのに自分の手にあまれば助けを求めるのか? あの時大口

を叩いて出て行ったのに笑わせるな。そもそも今更私がローデンの為^にに動くと思^うのは感傷が過ぎるぞ」

かつての息子の一人が、持っていた穏やかさをかなぐり捨てて必死とも言える口調で言い募るのを切り捨て、皮肉な口調で応じた。

とうにシャイアもプリスもない今、禍^{まがつい}つ祝^{いわい}に守られてもいないのに自負心だけが高く腐りきってるだろう彼の国に私は欠片の情も残してはいない。

「…それでも今お力をお借り出来るのは貴方様だけなのです、『黒のライル』。対価なら私が支払います」

「私は『黒』だ。それが分かるなら来るがいい、ローデンの者よ。貴殿の望む形ではないかもしれないが、得るものはある」

情に頼るでなくローデンの使者としての口調で話す息子の冷静に過ぎる声に、私も他人の口調で言葉を繋げ一方的に光を消して術を打ち切らせる。あれにも色々^とと煩悶があるのだろうとは思^うが既に手を離れ独立した者に甘い顔をする気は全くない。しかもあれが選んだのは私には全く理解できない道。今ローデンの『災い』を抑えているのはお前だとすぐに分かるのに何処までも日陰の道を行くというのだから。

一度、頭を振って意識を術式の構成に戻す。今はそんなことを考えている場合ではない、あの私に似た天の使いが言った言葉が本当ならば、世界を安寧させる四大魔術師の一人、『黒のライル』としてそれを止めなければならぬ。…問題は、それに『白』が関わっているかもしれないことか。

「……全く……困ったものだな……」

何故、日々は早くに流れてしまうのか。
詮無い言葉は、喉の奥に留めた。

暫くしてやってきたローデンの筆頭騎士に、カバキのことを告げその間の『妖し』^{あやかし}の抑えを確約すれば、表情には出ていなかったが私が『黒』であることに驚いたのであろう彼は、時間がないこともあつてかこちらを質問責めにすることもなくカバキを探しに外に出て行った。観察されることは好きではないからありがたかつたが：視線が喉仏と胸元を上下していたのが笑えた。私の顔は整っていないとは言わないが、決して女性的なものではない。つまりまだ、民間では『黒』の魔術師は女だと思われている：シャイアの死は浸透してはいないということだろう。もう、半世紀以上たっているのにシエインにカバキがローデンに出立する旨とその準備、それとこの部屋の入室禁止を告げれば何か思うところがあつたのが大人しく頷いて準備にかかつていたようだった。とはいえ、もともとあの子は破天荒なことは一点を覗いて言うことも行動することもない子供だったが。

ともあれ、私は自室に一人でいられる時間を確保してから床の中心に書かれている巨大な術陣しゅじんの中心に立った。呼吸を整え目を瞑り意識を深く己の内に沈め、眠らせている力を全て捉えるように両腕を前に伸ばして組む。

目を瞑っていても、自分の髪がゆらゆらと揺れているのが分かる。それはまるでそれ自身が魔力を帯びているかのよう、いや：「まるで」ではない、実際に内部の魔力が放射を求めて髪を操りうねっているのだ。収まりきらない魔力がその器にもなっている術陣へと零れ落ちて黒い光を放つのがその気配だけで分かる。

全力も久しぶりだな。

集中が途切れぬ程度にこっそりと笑い……私は術陣に押し出され

るように、身体を脱ぎ捨ててローデンへと一気に転移した。

……のだが。

『災い』の居場所は分厚い結界が見えれば直ぐに分かり、私は城の地下牢へと移動していた。結界の中眠りにについているカバキよりも幼く見える少年への待遇は、一見ただけであり良いものには見えない。だが、彼の力を考えればそれも当然だろう。…少年が暴れたとするならば、そうさせた存在は唾棄すべきものだが。

しかし……あれも何と言うか……　ここまで頑丈な結界を張る必要があったのだらうか。これなら、その性質を読んで効果的なものを張ったほうが余程効率がいい。これでは負担も少なくなかろうに。

牢の前、中空で僅かに浮きながら私はため息をついた。何をしても今の私は誰も……宮廷魔術師にも見えないと分かっていたから隠そうとはしない。

勿論、これはしようがない措置なのだろう。あれは準備も無く目の前で『災い』の気を読むことも出来なかったのだから。

……そこまでして、今の立場でいたいのか。本当に、莫迦な息子だ。私はあれの張った結界を解き、その力の残滓を練りながら宮廷魔術師の力も取り込んで新しい結界を張り始めた。

ライル02（後書き）

PV1000を超えて小躍りしております。これからま、どつどつよろしく願います（礼）。

あー……誰か助ける……………。

思わず命令形にもなる（誰に対する命令なのかは自分でもわかんねえけど）。なんかもう、『助けて』って頼むほど殊勝な気持ちを置き忘れたくなるんだよつ。

ただでさえ慣れない馬なのに、こいつはシェインが見えなくなつた途端思いつきり早駆けしやがるし、文句言おうにも下手すりゃ舌噛みそうになるしつ、それどころか内臓ひっくり返りそうになるしつ、ケツは痛いし！ しかもまた米俵扱いだったしな！！

そう。酔つ払つた馬から降りることも出来なかつた俺を、この男はまた肩に担いで船に乗せて今に至つてるワケで……。船室のベッドの上でとりあえずうつ伏せで横になつてんだけど、この船がまた揺れるんだ。船酔いなんて、こんな初体験はいらねえつての。

腕が手持ち無沙汰だったし枕を抱いて、なぜか同じ部屋にいる男に視線を向けてみる。まったくもって変わらず壁際にある机の上で何か書き物をしてるようだった。こんな揺れるところでよく出来るもんだ。勿論、感心してるワケじゃねえし。嫌味の一つでも言つてやりてえけど、腹に力を込めたら違うモンが出てきそうで黙つて耐えるしかないのがツライ。あれか、寧ろ出しちまつた方が楽になれるのか？ いやいや、俺にだってなけなしのプライドつてもんがある、根性だ根性。

あー、でも……うあー……誰か助けてくれー……………。

またぐらぐらと船が揺れて、今度はちょっとばかり情けない呻きになつてた。声に出てなくて良かったよ。

船はその日結構いつまでも揺れていた。食事が部屋に運ばれたらしいけど、俺は気持ち悪くて枕から顔を上げることすら出来ず、でも吐くことはしたくなくて眠気がやってくるまで呻いていた。ようやく慣れ始めていた場所から放り出され、振り回されて何の説明もねえのも結構精神的にしんどくて。

俺はこの夜心底元の世界に、桜花おうかに帰りたいって、思った。

あ、あんま揺れてない。

目が覚めて最初に思ったのはこれだった。胃はちよつとだけムカムカするけど、我慢できないほどじゃない。あー、良かったー。

……あ、あいつもいない。

「大丈夫ですか？」

視線を巡らせて男がいないのを確認すれば二重に安堵。そおつと俺が胃を撫でてると急にそんな声が入り降ってくる。あの男？と思っただけ高めの声と丁寧な口調は間違いなく違っていて、目線を上げれば知らない顔が少しだけ屈んで俺を覗きこんでいた。

「船酔いがひどかったと聞きました。昨夜は随分荒れましたからね…今朝は持ち直してほつとしております。お加減は大丈夫ですか？食事をもちしました、少しはお召しになれますか？」

肩辺りで切りそろえられた明るい艶のある栗色の髪が、この人の動きに合わせてさらりと揺れる。切れ長の目から来る鋭そうないメージに合わない柔和な表情と、優しい声。思いがけず目の前に現れた人物に、その所作に、俺は視線を合わせたまま間抜けにも、返事をせずじつと見上げてた。

いや、だつてこんな美人滅多に見られるモンじゃねえつて。身長はよくわかんねえけど、全体的に小作りに整つてる顔とか、澄んだ青い目の下の妙に色っぽいホクロとか、俺と似たようなカツコしてんのにおしゃれに見えちまうスタイルの良さとか。思わず喉仏と胸確認しちまったもん。…うん、男だ。健全な青少年としては正直残念だ、と思つてもバチは当たらないと思つ。

「…まだお疲れでらっしゃるみたいですね。乾パンを軟らかく煮てあります、良ければ冷めないうちにお召しになって下さい」

黙つてる俺に困つたのか、でもそんな表情をおくびにも出さずに目の前の美人さんはそれだけ言うで一礼して扉の方へ向き直つた。きつと戻るのだろう、と思つたのに俺は彼の着ている服を咄嗟に掴んでいた。

うわ、俺何やってんだ!?

「どうかなさいましたか?」

いきなり服なんて掴んだからだろう、少し驚いていたような表情が華のように微笑む。でも俺は、別に用事があったワケじゃなくてただ、無意識に掴んじまつただけ。…多分、何となく離れがたいというか、そんな感じていたんだ。え、あれ、何でだ俺、さっきからっ!

「えーと、その。…そのっ……」

微笑んだまま焦つてつつかえ出した俺の言葉にツツコミを入れることなく穏やかに待つてる目の前の彼。それが余計に俺のパニック万歳状態を助長してるって、多分知らないんだろうなあ。いや、俺が悪いんだけど。用ないのに呼び止めてるし。なのにタイミングを

はずしちまって、今更「何でもありません」なんて言えるわきゃあない。

えーと、そのっ、そのっ。 そうだっ！！！！

「……………メシ、じゃなくてごはん！ ごはん一緒どうですか？」

具合が悪いと思ってしていた俺の唐突な提案にびっくりしたんだろう、彼はふ、と笑顔を消した。そうすると端正な表情のせいか一気に冷たく見えて、そのギャップに目を瞬かせる。やっぱり図々しいことを言っただらうか、そうだよな仕事とかあるんだらうし、謝ったほうがいいよな。

「では、私の分を持って参りますので、申し訳ないのですが少々お待ちいただけますか？」

俺が謝ろうと口火を切る前に穏やかな声で若干かぶせがちに答えてくれる彼に、俺は何回も頷いた。「そんなに頭を揺らしてはまた気分が悪くなりますよ？」と笑うと俺の食事が乗ってるトレイを窓際とは別のテーブルに置いて、丁寧な礼と共に一度部屋を出て行く。あの男といた時の塞いだ気分が、大分上昇したなあ。折角だから色々聞いてみよ。俺、シェインに聞いたこと以外何も知らねえし。

ん、ていうか。まずは彼の名前だな。

部屋にある何だか凝った彫り物がしてあるテーブルについて、揺れる船に少しでも慣れようと同じ方向に身体を揺らしてたら、あんまりたないウチに美人さん（男だけだな）は戻ってきた。自分の食事が乗ったトレイを持ってても俺とは大違いの優美で落ち着いた物腰で座った彼は、アイツ、ゼメキス（名乗りもしない人間の名前なんか絶対呼ばねえけど）の副官で、ネレイドと名乗った。

向い合せに座って、ドロドロな見た目に反して甘く味をつけてあるせいか結構うまい乾パンがゆを口にしながら合間にぼつぼつと話をしたんだけど、それが却って良かった気がした。

なんせ俺はシェインからの知識以外本当にこの世界のことな————んも知らなくて、逆に言えば何を聞いていいのかすらも分からないくらい。だから最初の自己紹介以外は、質問を考えながらの話になるワケで。で、口にモノを入れながら話すのはやっぱ失礼だとも思うワケで。パンがゆを口に入れてゆっくりと咀嚼しながら「えーと、何をどう聞けばいいんだっけ」とかそんなペースだぜ？ お互いメシでも食ってなきや正直間が持たねえって（っーか多分ネレイドが痺れをきらしそう）。

まあ胃も本調子じゃなかったから、それくらいのペースの食事です度よかったと思う。

「へ？ っー、アイツの部屋なの？」

そんな会話の中、終わりごろに出てきたのがそんな事実だった。アイツ。全くと言っていいほど口を利かないで人を米俵扱いしやがったある意味略奪者（いや、違うんだろっけ俺ちつとも事情知らねえんだもんよ。しかし、正直アイツに聞くのも腹が立つ）。

そのアイツの部屋？

「ええ、ゼメキス様の部屋です。何分この艦は速度を重視し、今回の任務の為に食糧の備蓄すら通常より減らしております…勿論、十日程度予定がずれ込んだとしても十分な程度にはありますが。なので艦長室ですらこのような殺風景な有様で申し訳ありません」

困ったようにため息をつきながらも、パンをちぎる仕草は何か優雅で、俺とは人種が違うよなあって感じのネレイド。まあ、顔立ち一つとっても明らかに俺とは人種が違うんだけど。寧ろ言葉が通じるのが不思議だぜ。そう思いながらも柔らかいネレイドの言葉を聞く。シェインといいネレイドといい、俺様系じゃない人の声は心地いいよなあ。落ち着く、ていうか。

しかし、じゃあ何で俺この部屋に連れてこられたんだろう。ていうか、はい？

「艦長!？」

「アイツが!？」

「ええ、筆頭騎士に軍の指揮権が与えられるのがローデン王国の慣例ですから」

ギリギリ、叫んだ時俺は食べ終わっていた。セーフ。じゃなきゃ口から絶対何か出た、危ない危ない。しかし、何か単語がポロポロ出てきて俺のわか知識では理解するのも正直難しい。でもまあ、つまり、アイツは結構偉い軍人ってこと、でいいのかな。……人望なんてありそうにねえけど。

「ふーん。なあ、ネレイド。時間まだある? ……っていうか、今じやなくてもいいんだけどさ、俺に色々教えて欲しいんだけどさ、駄

目かなあ
」

だから俺は全く木で鼻をくくったようなどうでもいい返事をした後に、聞きながら思っていたことを頼んでみた。正直これからドコに行くのか、どうなるのか、帰れるのかも全くわかんねえ。でもせめて分かるそこから学んでいった方が漠然と不安に流されるように過ごすよりはよっぽどいいなって、あの家を出て余計にそう思うから。勉強なんか好きじゃねえけど、この際腹を括るしかねえっしょ。…なんて、のんきなこと考えてられたのは、多分今の待遇がそんなに悪くないからだと思うけどさ。こうやって体調が悪ければやわらかいもの出してくれるし、嫌いだから断ったけど頼めば薬も準備してくれたみたいだし。

頼みを彼はすぐに了承してくれた。唯一の条件は「この部屋で」ってことだったけど……ここでそんなこととしてアイツに何かいわれねえかな。不機嫌になったりとか。
ま、どうでもいいか。

その後食事を片付けてから戻ってきたネレイドの説明は分かりやすく、勉強が苦手な俺でもするすると頭に入った。

んーと、ここ、シユノーゲン大陸の地図ってシエインに見せられた時にも思ってたんだけど、翅広げた蝶によく似てる。まあ、蛾でもいいんだけどイメージ的には蝶かな。

胴体部分にあたる陸地と、左右ほぼ均等に広げた翅に見える陸地。それを繋ぐ付け根部分みたいなのは山岳地帯で、一般人はまず移動は不可能なんだってさ。あと、鱗粉みたいに大陸の周りに点在する幾つもの島。その中でも一番大きい島、ダルーインがライルとシエインが住んでる今まで俺がいた場所で、これからは左側の翅の真ん中辺りにある小さな国、ローデン王国に向かうらしい。ダルーイ

ンが地図の西南ぎりぎりの場所のせいかな、一番早い船を荷物ぎりぎりに減らしてすっ飛ばしても海流の関係とかもあって、大陸に到着するのに10日くらいかかるんだと。

「げ。じゃあそこからまた馬…っ？」

またあんな内臓ジャンピングな思いをしないとなんねえのかよ。思いっきりしかめっ面した俺を宥めながらネレイドは首を僅かに振る。彼のちよつとした仕草に即座に反応する栗色の髪は、それだけで装飾品みたいだ、と何となく思った。うん、眼福。

「ダルーインは森の島ですから馬を使いましたが、キマダに到着しましたら街道を通りますから馬車です。馬よりは乗り心地がよろしいかと思えますよ」

キマダ…ああ、大陸の西の部分こそう呼んでんだよな、確か。胸の中でそう復習する。で、その中に北のロウリンド・真ん中のローデン・南のヨハスって三つの国が在るんだっけか。おお、なんか今なら中間でも期末でもドンと来いな気分。

それに、馬じゃないんだ……良かった。心底良かった。

まだ大分先の話だけど、丁寧なネレイドの説明に俺はこの日一番の安堵のため息をこぼして彼に笑われてしまった。

ゼメキス03

ふ…っ、と扉の外の気配に目が覚めた。

それが誰のものか直ぐに分かつて入るよう短く声をかけた後に、確認しておいた時計に視線をやればもう日はとうに昇っている時間だ。決めていた時刻よりも過ぎていることに眉を寄せた。我ながら自律が足りなすぎる。

「ゼメキス様、おはようございます。…寝台でお休みにならなかったのですか」

入ってきたネレイドの視線は、挨拶もそこそこに使われた形跡のない寝台を通ってこちらに向かつてきた。軽い非難が混じっているが黙殺しようとして、それも良くないかと思い返す。昨日、『アレ』を一晚見張っていたようにしていた俺を止めて寝るよう勧めたのが彼だ。

「いや、書類を持ち込んで読んでいたらそのまま眠ってしまった。助かった」

つまり、机に肘をついて寝てしまったのだとあっさりばらして感謝の意を示す。…予想通り騎士に似合わぬ端麗とも言える顔を洩らせてしまったが。

「まだ帰国まで日にちはあるのですよ。長時間とはいいませんが、さすが眠れる時はゆっくりと寝台でお休み下さいませ。然程神経の細いワケではございませんでしょうに」

事実だから何も言わないが語尾に若干毒が入ってるぞネレイド。

…それよりも心配なのはお前の方だ、と少し線が細くなったようにも見える副官への言葉を押し殺した。身体は鍛え上げている筈なのに、彼は不調がすぐ表面に出る。心の中を読ませることはないのに不思議なことだ。

「悪かった。……『アレ』はどうだ」

「仰られた通り、酔いが酷いようです。薬があれば良かったのですが…、体調は今は多少落ち着いているようです」

片手をあげて軽く降参の姿勢をとり、様子を探ねればその内容に眉を寄せた。

基本的に薬の類はあまり安価ではない。勿論、軍艦には常備しているものだが今回の出航は何分にも急過ぎ、新しく建造したばかりの船は準備も十分ではなかった。その上、船酔いする船乗りはまずいないし、船上の任務につく騎士もそうだ。その為客人を乗せる予定がない場合、酔い止めの薬は常備薬を準備する中でも一番後回しにされるのが普通だった。

しかし、昨日の様子はさすがに酷かった。あまり『アレ』の消耗が激し過ぎては困る、どうにかして薬を手に入れた方がいいな。落ち着いているということに多少安堵しながらも通信紙に酔い止め薬を要望する旨を書きこんでいく。

「一緒に食事を、と乞われました。了承しておきましたが、問題ございませんね？」

首肯した。付き従う、ということは相手のふところに入りその身辺を探ることと同意。だからこそ、ネレイドも親近感を持たれるよう、常の騎士の正装ではなく一般人になじみ深い平服を着ている。

意図を十分承知しているだろうに、それでも尋ねてくるのは『アレ』の立ち位置があまりに不透明だからだろうか。

「『アレ』がどう役に立つのかはわからん。だが…支障がない限り客人として遇する」

「畏まりました」、と礼をしてネレイドは出て行った。その前に「もう少しお休み下さい」と釘をさされれば微かな苦笑いと共に浅く顎を引く。優秀な副官が自分の船室から出て行けば、間借りしている上官である俺は他にも書きこんだ通信紙を至急と念を押しして呼んだ別の配下に命じた後、大人しく彼の寝台を拝借してしばし体を休ませることにした。船の運転に支障はない、何か問題があればここに来るよう配下には周知徹底してある。頭の中で全ての確認を済ませながら、眠りへと落ちていった。

「
っ！！」

一瞬、何が起こっているのか分からなかった。それでも経験則で咄嗟に受身を取ったせいで、吹き飛ばされ木に体を打ちつけることになっても大事にはならなくて済んだ。それでも体を貫いた衝撃に声にならず息が詰まって呼吸の仕方を一瞬忘れる。

「うわあっ、ごめんなさいすんませんっ」

慌てふためいたような声が少し離れたところから聞こえてくるのを、大きく息を吐き出し下生えに手を付きながら認識する。声……？俺は今魔法で飛ばされたのか？考えにくい可能性がそれでも頭を過る。サウムら宮廷魔術師によって対魔法防御をかけられてはいるものの、ここは四大魔術師の長の拠点。無効化された可能性も

あるからだ。

その割に、近寄ってくる足音は、一度止まって間隔が長めになつたものの再び止まる様子はない。近づいている……こちらが何を仕掛けても倒せる程身体能力にも自信があるということか？ 油断させて羽交い締めにすべきか迷いながらも起き上がるのを選んだのは、耳に届いた先ほどの声が畏というにはあまりに懸命な響きを帯びていたからだろう。

判断して起き上がった時、俺に近寄ってきた正体と目が合った。

「……誰？ あ、じゃなくて本当すんません怪我ないっすか？」

銀の、光に包まれた少年だった。眩しくはないやわらかなものではあったが、何故か視線を即座に逸らす。革鎧や脛当てなどにこびりついた下生えの欠片や埃を払いながら、油断無くすぐ側にいる相手の気配を探った。謝罪のつもりなのだろう、驚くほど無防備に頭を下げていたのが空気の流れで分かる。その後、こちらの様子を伺う視線も呆れるほど拙く、ぎこちない。

……『コレ』は、なんだ？

身繕いを手早く済ませた時には既に光は消えていて、そこに残っていたのはあまりに無防備な少年の姿だった。

くすんだ茶色の髪、象牙色の肌、黒い瞳。少年にしては伸びた身長に、若干細い体躯。そう、黒の魔術師殿から特徴を聞いてはいた。だが、聞かなくともきつとわかっただろう。これは、人ではない。少なくとも、シュノーゲンの人間ではありえない。あまりに、均衡がとれてない。『魔法』を使うものに共通する賢しらな雰囲気どころか、こちらを心配するその眼は年相応に幼く純粹にすら見え

「迎えに来た」

「迎え？」

そんな自分の思考を振り切り、眼下の少年に用件だけ告げる。戸惑った少年が目をみはるが、彼に話は通っていると聞いている今、それ以上は言うつもりはなかった。そうだ、今は何より時間が惜しい。

「ああ。時間がない、行くぞ」

「へっ？」

これが『災い』を鎮められるものというならば、早急に連れ帰らねば。

自然に目が覚めた。　　ということとは、先刻のは…夢、か。いや、実際起きたことなのだから眠りながら思い返していたのかもしれない。我ながら器用なことだ。つまり、それだけ衝撃的だったのだろう。思い起こせば、少年時代に初めて魔法を目の前で見た時にも興奮してなかなか寝付けなかったものだ。長じてくれば魔法は私にとつてあまり手放しで喜べるものではなくなくなってしまったが、それでも、あの銀の光は……。

「艦長、よろしいですか」

ノックの後に発せられた配下の声に応える。入ってきた者と航路の確認をしていた時には取り留めのない思考は既に忘れていた。

「ネレイドつつ、海だっ！」

航海三日目、晴天。

甲板に出られた俺はやたらとはしゃいでいた。いや、だって昨日も結局あの部屋から一步も出なかつたし。出ようとしても「体調が心配ですから」なんて、やんわりネレイドに止められたらやつぱり押しできねえじゃん？ うん、素直に認めよう。俺、例え男だろうと美人には弱いんだ。じゃなきゃ我ながらこの懐きっぷりは説明出来ない。

あ、でも食事は普通の食べられるようになった。なんでその時にシェインのパンを使ってもらおうように頼んでおいしくいただいたりした。…シェインも元気してっかなあ。さすがに不満をネレイドに言うのもどうかと思うし、こういう時はあのほんわか美少女顔の美少年が恋しくなる。いや、愚痴要員ってワケじゃねえけど。

だってさ、部屋変えて欲しいのにネレイドは「艦長室以外はともお休みななれませんか」とか言うし。ならアイツを追い出せーってなもんだ。いや、マジに。ベッドは一つしかないんだぜ？ 一緒に寝ろってのか？（まっぴらごめんだけどな！）ま、昨日も一昨日も俺はアイツより先に寝て後に起きてるからどうしてんだかさっぱりだけどさ。

ちなみに、部屋が一緒なせいで共有してる時間もあるんだけど、アイツは仕事ばっかしてるし俺は歩み寄る気さらっさらないんで、まだひとつことも口きいてない。どんだけ無口なんだか嫌われてんだか微妙。そして俺はどつちでも大いに結構。

そんな俺の微妙な不機嫌を目の前の海がキレイに吹き飛ばした。俺は色々と作業している人の邪魔にならないようにしながらも、や

つぱり興奮して甲板の先、舳先近くまで走って手すりに捕まりながら生まれ初めての海を眺める。何処までも続きそうな青い海、船が切り裂いていく数多の波、白い波頭は光がきらきらあたって眩しいくらいだ。声だつて弾むの当たり前。肺一杯に空気を吸い込む。うーん、やっぱしょっぱいんだ。

「トシオ様は、海がとてもお好きなのですね」

優雅な物腰で殆ど足音を立てずにネレイドが隣にやってくる。その声には僅かに笑みが混じっているような気もしたけど突っ込まないでおこう。肯定されたら恥ずかしいじゃんか。

「つか寧ろ積極的に突っ込みたいところはそこじゃないし。」

「あのさあ、ネレイド？ どうして俺のこと『様付け』で呼ぶワケ？」

手すりに肘をついて隣の柔和な表情を見上げる。その瞳は少しだけ俺の言葉に不思議そうな色を湛えていたけど、空よりもこの海に近い青だなんて、思う。

「てゆかさ、不思議に思うのはこっちじゃん？」

この世界が年功序列か実力主義かわかんねえけど、どっちにしたって俺を『様付け』で呼ぶのは変だ。ネレイドは明らかに俺より年上だし（聞いてないけど多分、二十歳なんてとっくに過ぎてる）、俺がこの世界のこと何にも知らないってのは昨日めいっぱいにわか教師をさせられたネレイド自身がよくわかってる筈。よく考えたら、こんな優雅（？）に海見て騒いでる場合じゃなくて色々船の手伝いとかさせられるくらいじゃん？ 寧ろ『貴様に名を呼び捨てされる筋合などない』とか言われて切捨てごめんされてもおかしくないっていうか（何のドラマの見すぎだ俺は）。

「今回、トシオ様を無事ローデンまでお連れするのが我々の任務。トシオ様は大切なお客様ですから、『様付け』は当然です。…お気に障りますか？」

「気に障るっつーか…慣れてねえし。そんな大したもんじゃねえよ？ 普通にしてもらっていいんだけど」

元々ただの学生なんだし、と続けてひとり大きく頷くと、隣の雰囲気が柔らかくなるのが分かった。

「分かりました。では、『トシオ』と呼ばせていただきますね」

「……別にもっと口調砕けていいのにな」

「元々こういう喋り方なので、出来ればこのままがありがたいのですが」

「そっか。じゃあ、痛み分けてことで」

何かいい表現ないかなあって思ってそう言ったらネレイドに本気で笑われちゃった。元が整ってるから、本当に華やかな笑顔になるんだよなあ。見てて得した気分にはなるんだけど、笑われること自体はちつとも嬉しくないぞ。ちえ。

「海、本当にお好きなんですね」

暫くして、笑いを収めたネレイドの栗色の髪が海風になびくのを視界の端に入れながら、まだ飽きもせず海を眺めていた俺は彼の言葉に勢いよく頷いた。

「うん、海見たことねーしっ。やっぱ青いんだなー、青っていつて

もこう、グラデかかっている感じで」

光がさしてるせいか、奥が白っぽくて手前のほうが緑がかっても見える青。不思議。幾ら見ても飽きないって、確かにあるんだなあ……そう思いながら海を見てほうつと息をつく。確かに波は波ではないのかもしれないけど、雄大すぎて圧倒されるっていうか見てるだけで癒されるっていうか。そうだよなあ、人類は海から誕生してんだもんなあ。……この世界じゃわかんねえけど。

「ぐらで？ ……しかしトシオ、海は青ばかりではございませんよ」

「は？ だって目の前真っ青じゃん」

『グラデーシヨン』という単語はこの世界にはねえのか、それとも略したのがまずかったのかネレイドは不思議そうな声を上げた後、俺にとっては不可思議極まりないことを言う。俺は隣のネレイドに視線を上げて手すりに寄りかかったまま前の青としかいいようがない海を指差した。

「ええ、ですがシュノーゲン大陸が四海しかいに囲まれていますからもつと北に向かえば黒い海、東に向かえば白い海、大陸をはさんで向かい側の海は緑の海です」

「はあああ!？」

何だそのくつきりはっきりの色具合は!!

「港の位置からすると、多分黒い海は見られるんじゃないでしょうか。…トシオは不思議な方ですね」

不思議なのはこっちの世界だっつーの。

そう答えようとした刹那、晴天なのに稲光が轟音と共に船の目の

前で光った。

ガルツァ 01

『青海^{せいかい}を航行中の艦船レンデイルからとある人物を攫^{せう}うこと。』

その依頼内容を聞いた時、とりあえず了解、と頷いておいた。相手が示した対価は僕が常日頃要求しているものだから、それが得られるのであれば断る理由はない。精一杯偉ぶってはいても隠しようもないびくついた態度や、こちらへ蔑むような思惟を抱いていたのも『契約』を終えた去り際の視線の欠片だけで分かったけど、正直に言えばどうでもよい。

よい、ん、だけ、ど。

おうちに帰りたいなあ、とか、ちよつとだけ思った。ああいう卑俗な顔を見続けていると、ロイスの穏やかな空気に触れなくなる。依頼を引き受けてしまったからそうはいかないし、すぐにでも転移しとくべきなんだろうね。艦船の位置まで指示されてるんだから。

でも、依頼を始める前に家に寄るっていうことも、ただの人間やちよつとした程度の魔術師には不可能でも僕には息をするくらいにたやすいんだよねえ…悩むくらいなら顔を見てった方がいい気もするけど、ロイスの顔を見ちゃったらそのまま依頼も放り出して二人でまったりしそудもんなあ…だから、やっぱり自重しかないか。

そして、控えてしまうからこそ、余計に会いたくもなるから感情というものは不思議だなと思う。それこそ、幼子だった頃から彼をずっと知っているのに。

せめて気分転換に一服してからにしよう、とお茶を淹れることにした。

ここは二人で暮らしてるダルーイン諸島の小島じゃない、ヴァタール帝国にある魔術師の召喚所だけど、召喚の魔方陣が描かれている部屋以外に休憩する部屋くらいはある。ある程度の大国には召還

所が備えられてて、そこで魔術師を召還するのが脛に傷持つ一般人の手順だから、この場所を作って維持しているのはその国自体。でも、僕ら魔術師も私物くらいは好きに置いてちやってるんだよね。だからこの、体裁としては外見からは普通の民家にしか見えない召還所にも、みんなお茶とか薬草とか『いろんな』燻製とか他の人に使われても害のない程度のもを置いていて、僕はお茶にした。ロイスが調合して焙煎しているこのお茶は本当に僕の好みでおいしかったから、他のみんなにも飲ませてもいいかなって。

でも、僕がロイスに関して譲れるのはそこだけ。後は何にもわけたげない、それは昔から決めていること。それを聞くとあの子は決まって哀しそうな顔をするから言わないことにしてるけど、間違っても鈍い子じゃないから勘付いてはいるのだろうな、と思う。

「僕って本当に……ロイスのことばかり」

一端流れ出した思考は堰を切った奔流のように僕を彼の方にたやすく押し流す。逢いたい、顔が見たい、話したい、触れたい、あの空気に包まれない。

『やつぱり一瞬だけ帰ろうかなあ』って思った時、隣の召還の間で気が不用意に乱れたのに気づいた。乱れたというか、揺れた感じ。新たな魔術師が空間を跳んで来た証だ。僕がぼけっとしていた間に誰かが召還所に入ってきて魔術師を召還したのかと考えたけど、それほど広くないこの家の扉が開けばさすがに僕だって分かるだろう。だから誰かが外から入ってきたっていうのはない筈。

ということは、この気の揺らぎは……ワザワザこの場所に魔術師が自分でやってきたってことだろうなあ。こんな場所に魔術師が一人来るとは思えないし、となるともう少しで相手がやってくる。で、お互いに「日のあたるまっとうな場所」を避けたワケだからあんまりいい話はないんだろうな。

そう思いはするけどささやかな食卓にお茶を淹れて、他の誰かの

持ち込んだ焼き菓子を手勝手に貰って一人のんびりと寛いでいた。勿論、こちらを認識出来ないよう部屋に結界を張っておくのは当たり前。でも、ロイスを思ってしんみりしていた気分が台無しにされちゃったんだから、あっちの話聞く権利は当然ある。だから、やっぱり予想通りにやってきたもう一人の人物との声だけこっちに流して聞き取りながらお茶を続けることにした。

「『アレ』はまだ見つからんのか」

「逃げたのならば直ぐに見つけ出せると思いますかね…。『アレ』はこの世の者ではないから、この世で生き抜く術すべなど知らない筈」

聞こえてきたのは陰気そうなくらいくらくらい声。結構人間としては年配の、あんまり友達にはなりたくない感じだな。それに応対している声は若い落ち着いた感じではあった。僕としては何の魅力も感じないけど。ロイスは声すらも素敵なのにね。

「しかし、見つからないではないか！ お前には分かっているのか、『アレ』がもし他人の手に落ちれば我々の計画は丸つぶれだ！ それどころか我々こそが駆逐されてしまうのかもしれないんだぞ！」
「落ち着いて下さいよ、草の臣。何事も急いてはいけない。しかし、『アレ』が自力で逃げ延びたとは考えにくい。誰かの助けを得られたか、それともかどわかされたか…」

陰気声が何だか激昂してて、それを穏やか声が諭してるっぽい感じ。…んー…『草』？ それって、あの教団の隠語じゃなかったっけ。あの哀れで鬱陶しい魔神エウロを崇拝しているエウレシア教団。しかも、民じゃなく臣ってことはそれなりに高い地位についているってことかな。あー、あんなの崇拝してるだけあって、あの教団って本当暗くて近づきたくないんだよなあ、もう声消した方がいいかなあ。

迷ってる間に、会話は続いてく。

「かどわか……!!」

「声大きい。既に手は打っておきました。『餌』になりそうなモノがいます」

陰気声が絶叫しそうになるのを、穏やか声がさすがにうんざりしそうな感じで止めてる。ま、それは同感。僕だってげんなりだもんね。声、もう少し小さくしようかなってくらいなもの。

「我々が動いているのを悟られぬよう、『彼』に『餌』の奪取を目的に契約しました」

「大丈夫なのか？」

「『彼』は対価こそ大したものではありませんがその力は今の私よりも上、仕損じることはありませんまい」

穏やかな声が、殊更柔らかくなって陰気声に語る。それでうまく陰気声を懐柔しようっていうんだろうし、実際うまくいって納得したような声を出してその後何かまた打ち合わせてその会合は終了したみたいだった。

けど。

とんでもない失態をしたのには、とうとう気づかなかったみたいだね、お二人さん。まあ、僕の結界の存在にも気づかなかつたし、そもそも他に誰か居ようなんて確かめもしなかった程度の人たちだからしょうがないけど。

僕はあるの二人の声に聞き覚えはない、だから相對したことは恐らくないだろう。だからといって僕とあの二人に接点がないワケじゃない。召還所での召還は、誰にでも出来ること……誰かに命じてさせればいいことなのだから。

そう、間抜けにもあの二人は契約した魔術師である僕を侮辱した

のだ。

僕とした契約との近似、そして対価を軽んじる態度。それだけで僕にはあの契約者の上に居るのが今ここにいた男なのだとはつきり分かる。僕の対価の意味を考えもしない奴を目先のことだけしか見ていない愚か者だと思おもするが、今は怒りの方が強い。

『契約』は正当な手続きで対価は先に誓約させている。

……だけど、抜け道が何にもないワケ、ないんだけどね？

じゃあ、さっさと下見にでも行くか。

僕は結界を解き、青海へと一気に飛んだ。晴れた青空の中、指定された大体の地点を上空から眺めると真新しい艦船が黒海方面こっかいに向けて航行してるのが見えた。頑張って速度を上げてるんだろっとなっというのが分かる。上から見ると、あんま実感はないんだけど。

よく見るか、と腕で軽く円を描き甲板の光景をそこに映し出せば、立ち働く大勢の中に見知った顔がちらほらと。そして、気が全く違う少年が一人。

こーりゃ、いいや。

僕は下見を早々に止めて嬉々として雨の気配を探り、白海上空はっかい辺りにあつた雷雲を引き寄せた。

やるなら、派手にやらなくっちゃね？

ちよっ、

ちよっ、

ちよつとまでー！ー！ー！っつ！っ！

さつきまで、すつきりと晴れた青空だった。白い雲がぼっかりくつきりと浮かんでたし、海との境目だつて曖昧なくらいで。

なのに、なんだこの状況！

一度の雷鳴の後急に空がかき曇って、凧いでいた波が嘘のように荒れ始めたんだよ。何だこれっ！船がゆれっ、ゆれっ。

「トシオ、部屋に戻っていただけですか」

急に荒れ始めた海、小刻みに揺れる船。今までの柔らかさが嘘のように引き締められた表情のネレイドから、そんなことを言われたその、断固とした強さに俺は頷くことで返事に代える。

ネレイドは俺と一緒に部屋に戻ろうとしたけど、俺から断った。突然のコトでみんなバタバタと動き回ってたし、部屋への行き方なら分かるし。俺の主張を聞いた彼は、「気をつけて」と何度も言うてから離れ、船上の各人に指揮を始める（俺ってそんなに危なっかしい？）。

…艦長のアイツも何処からか出てきて檣を飛ばしてるっぽい。何言ってるのかわかんねえけど、声が結構通るから、アイツのだったのは分かる。

慌しくなる船上の人の動き、けどそれを嘲笑うように乱発する雷に続いて滝のような雨まで降ってきた。

……これって何かのイジメ？何なんだよこの運のなさはさー。雷なんて船に落ちたらただじゃすまねえぞ。今んところみんな海に

落ちてるからまだいいけど、船って避雷針と違ってあんなのかな。

独りごちつつ、びしょぬれになりながら邪魔にならないよう揺れる船の手すりに掴まってゆっくり船室に向かって移動する。体が冷たくなるから出来れば急ぎたいんだけど、揺れてるからまず無理。濡れてるから滑るし雷が始終鳴ってればあんまり急ぐのもなんだか自分に落ちそうで怖い。それに、揺れが酷くなってるからまた船酔いが来そうだし。そういう意味では一人でマイペースに動ける方がいいかも、なんて思っていたら。

「うわっ」

いきなり腕を引っ張られてつんのめる。つーかこけるこけるこけるっ。

って、あれ、痛くない。ちょっとばかり硬い感触はするけど…って、何だ支えられてんのか俺。お互いずぶ濡れなのに、支えてる人の体温は俺に比べると随分と高くて、ちっとあったかい、とか思った。

「何をしている。早く戻れ」

「って、お前かー！ーっ、戻ってたのを邪魔してんのはお前だっ！ー！！」

反射的に叫んだ。煩そうに眉を顰めてコイツは心ならずも腕の中にいる俺を見下ろしてる（お前がでかすぎるんだ！）。そう、いつの間にかやってきたのか、コイツ、無口男ゼメキスが俺を支えてやがったんだ。…あれ、支えてくれたのはありがたいのか？ いや、そもそも転びそうになったのはコイツのせいだろう。そう思いながら体勢を立て直し、にらみながら離れる。

「いいから戻れ。来る」

「お前なあ、もう少しまともに言葉の使い方ってもんを…って、何

が来るって?」

雷雨ならもう物凄い勢いで来てるだろうが。

「僕のことじゃないかな?」

無口男に問いたただそうとした俺に、背後から呑気そうな声がかかった。誰だろうと振り返ろうとしたけど、アイツが僅かに顔色を変えて俺の腕にもう一度手を伸ばす。

けど、それは一瞬遅かった。

「うわわわわっ!」

ひゅん。

そんな軽やかな擬音がぴったりするくらい、俺は腕を引っ張られて呆気なく宙に浮いていた。

……えーと、俺ってば今、拉致られてる? っというか、この世界の人間って生身で空を飛べんの? 翼とかは全然見えないんだけど。

「トシオ!?!」

「……宙に浮いてる!?!」

「どうなってるんだ、船の制御がっ」

「……アイツだ、見てみる……ガルツァだ、アイツの仕業だ!」

「ガルツァって し、紫紺のガルツァ!?!」

雨に叩きつけられながらも切れ切れに船上の音が聞こえる。最初

に届いたのはネレイドの、かな。…やっぱ、宙に浮いてる人間ってのは、この世界でも珍しいもんなんだ。

けどそんなことより引つ張られてる腕が痛え、全体重を腕一本で支えてるんだから当然なんだけど。

「はあい、ゼメキス久しぶり、元気だったかな？ …初めまして、僕はガルツア。君、このままだと腕抜けちゃうから僕にしがみついでくれる？ 痛い思いしたくないでしょ？」

前半をアイツ、後半を俺に向かって話しかけられて、俺は何となく毒気を抜かれてそのまま言う通りに支えてもらいながらその人ガルツア？ の腰にしがみついた。そうしたら「もうちょっと上がいいかなあ」とか言われて肩と胸から腕を回す感じに移動。背中を腕一本この人に回されてより安定した感じ。…初対面の人に何密着してんだ俺。まあ、相手が女の子じゃないのはここまでくっついてれば分かる。男でつまらないと思うべきか、セクハラとか面倒なことにならないから男で良かったというべきか。…あれ、俺が今攫われてるんだからセクハラどころじゃねえか？

現実感がないんだろう、かなりずれたコトを考えながら、密着した状態の相手をこそっと覗いてみる。…紫紺のガルツア………だっけ？ そう言われる理由はこれなのかなあって思うほど見事な紫色の髪。暗めだから『紫紺』なんだろな。まず間違いなく桜花あつちじゃ「染めてる」って言われるだろう、自然じゃありえない色。この雨の中、俺の頬や腕をくすぐるほど長い髪は濡れてるところかしかった感じもないサラサラしてて、その髪に縁どられた顔は、ちよつとだけ垂れてる二重のキレイな目と悪戯っぽい笑みが印象的だった。

「離せ」

「やだなあ、ここでこの子離したら濡れた拳匂ぐっしやりだよ？ 大切な『お客様』なんでしょう？」

ぐっしやりって……潰れたトマト状態だろうなあ、間違いなく。まあ、実際はそうならないと思うけど。俺、『壁』は意識的に出せるし、それになんというか……俺を抱きながらアイツに話しかけるガルツアは、俺が知っている『物騒な連中』とは間違いなく違っていたから。本気で物騒な連中と接していると、そういうことするかどうかって肌で感じるもんだよ。うん。

「お前の戯れに付き合ってる暇はない。雷も止める」

なんとというか、アイツの返事も素気無いよなあ。って、雷止めるって……なに、そんなことまで出来ちゃうワケ!?

信じられない思いで周囲を見渡す。雨はやや小降りになってたけど、時折響く雷鳴は変わりない。けど…… ああ、なるほどそうか。その事実を目の当たりにしながらも信じられない思いで俺は嘆息する。

雲が、この船の上にはしかない。周囲の空はさっきまでと同じ、眩しいくらいの晴天だったんだ。自然というには、あまりに局地的な雷雨。

「んー、でも僕『契約』しちゃってるからねー。このままだと連れてっちゃうよ?」

カラカラと笑うガルツアの言葉に、アイツの表情が変わった。

降り始めた時よりは弱いけど、間違いなく降り続いてる雨。まだ時折雷鳴が轟いて、その度に一瞬周りを太陽よりも眩しく照らす。

俺はいきなり現れたガルツアって名乗った人物に捕まっつてとか掴まっつて、船からは届かない中空に浮いていた(……なんてシュールな)。小刻みに揺れる甲板では、船を何とか動かそうとしている水夫たちとは別に、微動だにせず仁王立ちでこちらを真っ直ぐに見据える瞳がある。

「……誰と契約した」

騎士らしいけど、船の上だからなのか周りのみんなとつまり暗めの色を除けば俺とも変わらないカッコ。だけど、アイツに駆け寄ってくる誰よりも大きいせいとか迫力のある無口男。低いけどよく通る声は、雷の合間を真っ直ぐ貫く。前髪の合間から雨粒が幾筋も顔に筋を作るけど、ゼメキスは瞬き一つしないでガルツアに詰問する。その瞳の強さに、聞かれてるのはガルツアの筈なのに俺のほうかドギマギした。

「あはははー、それを真っ正直に言うワケないでしょ？ それとも『命令』する？」

ガルツアは、俺を抱きながらまた笑い出した。人をバカにしたような顔と声に至近距離から横顔を見れば、性別不詳というか、どちらでもない中性的とも言える顔はひたすら楽しそうだった。なんつか……何かに熱中して楽しいつてのとも雰囲気違う。どっか、高みの見物みたいな感じ？ うん、この人と緊迫とか必死って無縁っぽい。落ちたくないからでもぞと抱きつく場所を微調整しながらそ

う認識。

「 目的は『それ』か」

「 うん」

目を薄く細め、唇を引き締めてまるで唸るようなゼメキス。今までは違う、声質というより感情から来る低い声。それにガルツアはあっさりと頷く。彼の暗い色の髪は、この雨の中水分を含んだ様子もなくさらさらと揺れてた。：ネレイドもそうだけど、何でこの世界のストレートの髪ってみんなサラサラなんだろうか。彼の筋肉の動きを感じながら、そんな関係のないことを考える。

「だって『それ』は要らないでしょう。」

君の誇りでありそれを打ち砕くモノ。

ローデンの国を腐らせ、無用な驕りを生み出すモノ。

最早『それ』を持つに相応しい『者』なんか誰もいない」

「ふざけるな！」

「魔術師が我が国を愚弄するか！」

「降りて来い、剣の錆にしてくれろ！」

「誰か弓を持って来いっ」

詠うような流れるようなガルツアの言葉の意味は俺にはさっぱりだったけど、船上の皆の怒号にも近い反応よりも、押し黙り腕だけで皆を制しているゼメキスの顔から視線が離れなかった。

俺はこの世界のことなんて分からない。

どうにかこの世界で暮らしていけるけど（てか寧ろ振り回されてる？ お世話になってる？）、シェインやネレイドに色々と教わったけど、まだ夢みたいな気持ちでいた。いや、異世界だと実感してはいたけど、ここで出会った人は俺にとってはまだ、可愛いだけ

の、優しいだけの、ムカつくだけの、何処か夢の中の人みたいだったんだ。

けど、今は……違う。

捉えどころがないガルツアの、まるで肉食動物が獲物をいたぶるように響いた声音に、あの無口男の眼は確かに 傷つけられ、心を抉られている。

それを見て、俺の胸がズキリと痛んだ。誰だって、誰かのそんな顔なんて見たくねえって。たとえそれが米俵男だとしてもさ。

「何かいいなよ、ゼメクス。みんなが不安に思っちゃうでしょ？」

それとも僕の言うことを肯定する？ まあ、本当のことだけど」

「…安い挑発にのるほど、ゼメクス様は愚かではございません」

止めて欲しくてガルツアの服を引くけど、ただ縋るようにしか見えなかったのかまだ何かを話しかけていた。そこに、穏やかだけれどきつぱりと断言する声が響く。視線を巡らせてみるとゼメクスの隣にネレイドが雨に濡れたまま姿勢よく立っていて、さっきよりも厳しい顔を見せていた。それが確認出来れば俺は深く安堵の息を吐く。彼が傍にいれば大丈夫、そんな気がして。

「彼を、離せ。ガルツア」

「嫌だと言っただろうするのかな？」

ゼメクスの、張りのある低い声が耳に届いた。真っ直ぐに。まるで、さっきの傷ついたような眼が嘘みたい。……ひよっとして俺の見間違いない？ そんなこと、ないと思うけど。そんな確信めいた思いが胸を掠める。

しかし、やっぱりガルツアはあっさりそんなこと言っちゃうワケだ。それって何か、相当根性悪い感じ。そう思いながらじとつとガルツアを見上げれば、今度は視線に気づいたのかにっこりと俺に笑

いかけてくる。今の笑顔、なんか猫っぽい。

「『命令』を下す」

「ゼメキス様!？」

そんなことを考えていた俺の耳に入ってきた思いもしなかったゼメキスの返事に、俺より先に素っ頓狂な声を出したのはネレイドだった。おかげでタイミングを外された俺は何も言いそびれて沈黙する。けど、頭の中はぐるぐるだ。

ネレイドの声でも分かる、ゼメキスがしようとしてることはとんでもないコトなんだ。……俺が、間抜けにもガルツアに捕まったから? 俺のせい?

そんなの、駄目だろ。

俺のせいで、ヤバイことをさせるなんて、駄目だ。

またあんな眼をさせるのはイヤだ。

それくらいなら、それくらいなら

後は何も考えられなかった。

体が銀色に光る。俺を包む『壁』の発動。

「な……!」

驚いたガルツアの、腕を掴んでた力が予想通り緩む。怪我させなくて済むなって、頭のどっかで思った。傷が少なくてすむならその方がいい。

「トシオ!!!」

「ッ」

誰の声も遠くで聞こえる。

俺は、更に強めた銀色の『壁』でガルツアを弾き飛ばして

墜ちた。

ゼメキス04

油断をしていたつもりは無かった。

晴天が俄かに掻き曇り、前触れもなしに雷が落ちたら当然だ。こんな非常識なことが出来るのは色位しよくいの魔術師しかない。その目的が何であるかわからない以上、あの子供だけは何としても守らなければならなかった。

なのに、あっさりと魔術師の腕の中に『アレ』は居る。選りよつて……何故今アイツが出てくるんだ。

「トシオ!？」

「……宙に浮いてる!？」

「どうなってるんだ、船の制御がっ」

「……アイツだ、見てみる……ガルツアだ、アイツの仕業だ!」

「ガルツアって　　し、紫紺のガルツア!？」

「騒ぐな、船を立て直すことに全力を傾ける」

騒ぎ立てる全員へ、改めて低く、だがはつきりと檄を飛ばす。

この最新型の艦船は速度は出るが従来の型に比べるとどうしても若干安定性に欠け、宮廷魔術師に掛けてもらっている補助魔法でもこの雷雨では限界がある分、船員の腕が今まで以上に重要だからだ。ローデンは水夫の経験者が少ない。内陸の国であれば致し方ないことではあるが、こんな嵐の状況では騎士よりも水夫をより多く乗せるべきだった。殿下の命でいきなりの出発だったからということ。を差し引いても。剣は魔法には勝てないのだから、水夫がいた方がまだしも船の立て直しには役だった筈だ。

「はあい、ゼメキス久しぶり、元気だったかな? ……初めまして、僕はガルツア。君、このままだと腕抜けちゃうから僕にしがみつい

てくれる？ 痛い思いしたくないでしょ？」

そんな俺達の状況も上空からなら丸見えなんだろう、ガルツアの俺と『アレ』にかけて来た声は相変わらず能天気で人の神経を逆撫でしてくれるものだった。魔法で身を覆っているのか服も髪も濡れていない姿は、正に人ならざるモノのようで今の自分達がずぶ濡れであるだけに不快感が増す。

若干弱まった雨の中、ネレイドに船の指示を任せ周りの面々がその制御に濡れた甲板に転びそうになりながらも走っている中、俺は甲板の中央、『アレ』を奪われた場所に立ったまま雨に打たれるのも構わずガルツアを見据えた。

「離せ」

「やだなあ、ここでこの子離したら濡れた挙句ぐっしやりだよ？ 大切な『お客様』なんでしょう？」

ああ、やはり『アレ』に狙いを定めたか。

時々、この魔術師は俺の前に現れる。そしてひとしきり大迷惑に人の邪魔をして騒ぎを起こしては「つまんなーい」と言いながら楽しそうな顔をして帰っていくのだ。出来るならば心の底からさっさと追い払いたい。だが、そういうワケにもいかない事情がこちらにもあるからしょうがなく付き合っているのだが：今回はそんな暇はない。今も、サウムらが『妖し』あやしの結界に力を尽くしているというのに、『アレ』を遊びの玩具に使われては困るのだ。

「お前の戯れに付き合ってる暇はない。雷も止める」

「んー、でも僕『契約』しちゃってるからねー。このまま連れてっちゃおうよ？」

返した声は我ながら冷淡だったが、返ってきた答えに思わず言葉

を失った。

耳障りな雷鳴、煌く雷光に意識が否応なくかき乱される。表情に出ずともどうせ相手は分かっているだろう、それでも今のこの焦燥を気取られたくはないといつも以上に冷静になることを心がけ、ガルツアを真つ直ぐに見据えて言葉尻を捕らえようとした。

「……誰と契約した」

「あはははー、それを真つ正直に言うワケないでしょ？ それとも『命令』する？」

ガルツアは、あの子供を抱きながら笑い出した。人をバカにしたような表情は遠くても容易く想像出来る。それくらい幾度も似たような目には遇わされているからな。

そう、つまり。幾度と無く俺の前に来たのと同じく。

「……目的は『それ』か」

「うん」

……まさか、そこまでこの魔術師がするとは。低く、唸るような声が出た。

ローデンの筆頭騎士が行使出来る色位の魔術師への『命令』は、同じ魔術師への『契約』よりも上位にある。つまり、ガルツアが今している『契約』を何の代償もなく取り消すことが出来るのは俺の『命令』だけだ。あの子供を無事に取り戻す為に『命令』することは、今までガルツアが何度もこちらに絡んできた目的に通じることが考えれば、少々考えづらいがそれが目的で『契約』したのかもしれない。

そして恐らく『アレ』を何の躊躇いもなく攫ったことから見ても、ガルツアの『契約』は今のローデンの状態と無関係な筈はない。それならば、いつそガルツアに吐かせるべきか……。

ヤツを睨み付けながらも思考を整理していた俺に、節のついたような流れるような声が雨の隙間から朗々と響いた。

「だって『それ』は要らないでしょう。」

君の誇りでありそれを打ち砕くモノ。

ローデンの国を腐らせ、無用な驕りを生み出すモノ。

最早『それ』を持つに相応しい『者』なんか誰もいない」

吟じる声にも似たそれは、俺にそれを事実だと突きつけて決る。

そつだ。『命令』は筆頭騎士のみが持つことの出来る一度だけの特権。魔術師に縊ることしか出来ない……言い換えれば騎士の力など役に立たぬと思ひ知らされる苦い権利。 なのに、持たざるを得ない国の為の錘。

シユノーゲン七国、全階級の人々の中で唯一他に類を見ないこの権利が、元々閉鎖的なローデンの特権意識を助長してきたのも確かだ。

そうして俺は、この魔術師のことを不快で、好意を持っていないワケでもないがこんなことまでしてかしてもまだ、信用はしている。筆頭騎士になつてからの数年の付き合いだから分かる、いつも軽佻浮薄を絵に描いたような男だが、大勢の目撃者がいる状況で自分を貶めるような虚言は吐かない。

それが、少なくともこの魔術師から見た率直な言葉であると、雨に打たれ体と共に冷めた意識はその声を脳髓に染み込ませる。

それでもこれがローデンと『私』に対する侮辱であることに変わりはなく、当然ながら激昂する面々を腕を伸ばし抑えこんだ。目線も声も、今は彼らに向ける余裕がない。だが、それが例えまごうことなき真実であつたとしても、ローデンの筆頭騎士はそれを認めるわけにはいかないのだ。

「何かいいなよ、ゼメキス。みんなが不安に思っちゃうでしょ？」

それとも僕の言うことを肯定する？ まあ、本当のことだけだ」「……安い挑発にのるほど、ゼメキス様は愚かではございません」

ガルツアのいつも通りの性格の軽さと悪さが同居しているような声に応えている、丁寧だが堪忍袋の緒が切れそうな声。雨の音に紛れたのか気づかなかったが、すぐ近くにネレイドが来ていたらしい。…相変わらず二人の相性は険悪だと思いつつも、いつも通りのやり取りに自然と紛れた気分で見線に移せば、こちらの方を心配げに見ていたあの子供が視界に入った。

そう、今の問題は国を憂うことではない。

国を今現実的に危機に追いやっている『妖し』をどうにか出来るらしいあの子供を、今ガルツアに抱き着いている彼をこちらに取り戻すことだ。

「彼を、離せ。ガルツア」

「嫌だと言ったらどうするのか？」

呼吸を整え、視線を改めてガルツアに合わせる。余分な思考は排除して、付け入る隙を与えてはならない。そんな俺を見てか、ガルツアはいつも通りの詠うではないからかいの声で返事をする。その声ならば、まだ冷静に事は運べる。まだ出来ることはある。

「『命令』を下す」

「ゼメキス様!？」

慌てたネレイドの声、それでも彼の顔は見なかった。

敢えて『命令』させることがガルツアの狙いであっても、魔術師に剣士の勝ち目が限りなく薄くとも、俺は出来ることをする。

召還をするワケではないが、腰の剣に手をあてた。一度柄に視線を向け、口を開こうとする。その瞬間。

銀の、光が見えた。その視界を覆うような目映さ、暗雲に覆われそうだった心を射抜く眩しさに、それが何であるのかを思い出すのが遅れる。

ガルツアが驚いていたのが意外だった。そんな表情は初めて見ると思ったのはほんの刹那のことだった。銀の光が、真っ直ぐに甲板へと落ちてくる。

あの子が、ガルツアの手を離れて。

「
ッ

絶対に受け止めてみせる、と位置を予測して駆け出した。

11 (前書き)

PVが4000を超えました。読んで下さる方、お気に入り登録を
して下さい方、WEB拍手を押しして下さい方、全ての方に感謝いた
します(礼)。

銀色の『壁』に包まれて、俺は中空から船めがけて墜ちてく。

雨も雷もまだ続いている筈なのに、それを感じられない猛烈な、容赦ないって言えるくらいのスピードであっという間に甲板が目の前に近づいてくる。

ちよつと。

ちよつとまで。待った。

俺、高所恐怖症なんですけどー！ー！ー！っ！っ！っ！

動揺して思わず丁寧語になるくらい、マジに怖い。上空で呑気にしがみついているだけならまだしも、このスピード感が半端ない。何でこんなことしちゃまったんだって本気で死ぬほど後悔。でも、だつてさ、どうしてもやだつたんだもんよ！

大丈夫。

大丈夫、俺には『壁』がある。

俺にも船にも傷はつかない（多分）。

だから平気平気へいき……って、それでも怖いものは怖いんだっつ！っ！

自分を落ち着かせるのに失敗して半泣きになりながら、いよいよぶつかるっていう瞬間俺は目をぎゅつと瞑った。

思ったよりは少ない衝撃。それでも声が出なくて、身体を硬くしたまま息を詰まらせる。い、生きてて良かった。

「……………無茶をするな」

耳元に、低い声が届いた。触れてる箇所の、あつたかい体温。誰のものか、なんてこの短い期間でわかっちゃまって。それでも確認するために恐る恐る眼を開けた。 って。

「またこのカツコカーーっ！」

思わずがば、と身体を起こして全力で叫んだ。バランスが崩れてぐらりと揺れて慌ててしがみつき直すのがメチャメチャカッコ悪い。そして殆どアイツが動じてないのがまたムカつく。

……いや、だつてさ。

眼を開けたらまた俺が米俵状態になってたらそう叫びたくもなるじゃん？ いや、正確には全身密着の上両膝を裏から抱えられてるみたいで、米俵になる一歩手前みたいなカツコだっただけ。

「仲いいねえ」

ゼメキスが返事するつもりだったのかは謎だけど、俺が叫んだ直後笑み含みの声がかかってくる。何の嫌味だ一体。そう思いながら身体を捻って上空のガルツアを睨むと、くすりと笑いながらゆったりと重力を無視したスピードでガルツアが降りてきた。本当、ガルツアって何者なんだろうなあ。魔術師とか誰かが言ってたみたいだけど、この世界の魔術師って万能すぎねえ？

しかし、どうやら俺が多少叫ぶのに動こうが捻ろうが、無口男は俺を離すつもりがないらしい。なのに俺がスムーズに動けるように腕の位置とか微妙に動かしてる感じがした。

……変なの。

あ、いやおかげで米俵もどきより楽なカツコにはなれたけどさ。…なんかあれに似てる気がしてならない。言いたくねえけど、曲げた腕に座った感じの、子供抱き？ とかいうヤツ。ひょっとしてコ

イツの抱き方のポリシーって『相手の神経に障るように』ってモンなんだから。

「退くか、ガルツア」

「そうだねえ：健気な子に感服。今日は退いとくよ。後おまけ、これ、使つときな」

俺を抱き上げたまま（いや、俺どう考えても軽くないんだけど。どんな筋肉してんだコイツ）のゼメキスが、空から降りてきて今は甲板に僅かに浮いているだけのガルツアに再び尋ねた。それに対して、ガルツアは呑気そうな返事と共に何かをこちらに向けて放り投げてきた。俺は片手を咄嗟に出してそれを受け取る。素材は上質そうだけど、やけに大きな白手袋。俺には大きそうだし、：多分ガルツアよりも大きいと思う。さつき俺をしっかり支えてはくれてたけど、それほど体格的に差はなかったし。

「そうか」

さつきまでの顔が嘘のように、淡々とゼメキスが返事をする。何か、俺の手の中にある手袋を見ただけで分かった感じだった。何だよこの以心伝心ぶり。疎外感たつぷりなんだけど。

そんな俺の心境も知らず、「じゃあねー」と最後までマイペースなままガルツアはまたふわりと浮いてそのまま何処かに飛んでいった。

それから、数時間。

ガルツアが去って直ぐ雨も雷も消えてまたピーカンに戻ったんだけど、船の上は雨で濡れてしっちゃんかめっちゃんかだった。なんで手の空いてる全員で甲板の掃除開始、俺も初めてそれに混ぜてもらっ

た。ただお客様扱いつていうの慣れてねえし、みんなが働いてるのに部屋でぼけっとしてるのも居たたまれなくなるじゃん？ あ、いや、船酔いしちまってたらそれどこじゃなくなると思うけどさ。

で、それも終わってメシも皆で食べて、満腹状態で……やっぱり艦長室に戻ってベッドでまったり中（当然無口男は居なくて一人だ）。

でも、久々にこう、集団で身体動かすの楽しかったなあ。一気に並んでモツプがけー、みたいな感じ。何人かと、ちつとぎこちなかったけど会話できたし。なんか、白桜^{はくおう}思い出してしみじみしまつた。…いや、まあそんなに昔のことでもないんだけど。でもあつちの皆どうしてんだろうなあ、俺いきなりこつち来ちまつたから騒ぎになってるかな。結界解けたとか『魔』に消されたとか思われてんのかな……、弔い合戦なんて見当違いのところにされたりしたら胃が痛みそうだ。

しっかし、本当いきなりこつち来ちまつたもんな……変な夢見て起きたら目の前にタミフルそっくりのライルが居てさ。それっぽい兆候くらいあってもいいと思うんだけどなあ、お陰で混乱してライルには変なこと言っちゃまうし恥ずかしいつうの。例えばさ、眠る前に変なモノ見たとか、歪み見つけたとか、だとしたらあんなこと……。

あれ。

……
ベッドに横になりながら満腹になったせいで自然と眠りにつく間にぼんやりと考え事をしていたら、ふと違和感を感じた。

この世界に来る直前に見たのっぺらぼうの夢。それははつきり覚えてる。

けど、その前。夢を見る前のこと、眠りにつくまでの記憶が、酷く曖昧で　　違う　　記憶が……ない……？　あれ　俺、

あの時……なに、して……誰と、……いたっけ………？
そこまでが限界だった。

お腹一杯の時に考え事なんてするもんじゃない。結局、俺は眠気

に全面降伏して寝ちまった。

ライル03

ローデンに赴き、結界を張り直してからは慌しかった。

気になる箇所を周りさすがに帰ってから暫くの間眠っていたが、まるで眠りから覚めるのを見計らったかのような時刻に『二人』から『庵』での会合を求め^{てんせい}る伝声の術が来た。眉間を押さえながら了承と返答し、一足先に転移した後にした欠伸はご愛嬌だ。

身体から離脱する術は体力を使う。身体から遊離した精神を忌憚なく融合させる為に多目の睡眠はどうしても必要なのだ。転移の際寝ぼけて全く別の箇所に跳ばなかっただけ良かったとすら言える。最悪シュノーゲンではない世界に放り出されたり、異空間に閉じ込められることもありうるのだから。

とりあえず少しでも頭をすつきりさせようと、湯を沸かしここに常備しておいた好みの茶葉で後に来るだろう二人の為に茶を淹れ始めた。それぞれが己の好きなものを好きにおいてある『庵』だが、茶に関しては四人の好みは大差無い。

諸国にある召還所とほぼ同じような体裁のこの『庵』は、しかし召還所と違い完全に浮世から遮断されている。建っている場所も特殊なら、シャイアの強力な結界が張っており一般人には知覚することすら出来ない。彼女は死後に自らが施した術の殆どを解説するよう晩年手を尽くしたが、敢えてそのままにしておいた箇所も幾つかあり、これもその一つ。術を掛けた当人がいなければその術は解けない以上、この上なく安全な場所だ。

「おいしそうですな黒殿」

「青殿」

茶葉に沸かしたての熱い湯を注ぎ込み蒸らしている間に、馥郁とした香りが広がっていく。眠気を多少引きずったままでもこの時間

やはり和むものだ。今ではシェインが上手に淹れられるようになった為に任せてはいるが、たまに自分で淹れるのも気分が変わっていい。ここでされる話が愉快なものではないのは確かだろうから尚更だ。

そろそろ注ぐかとポットを持ち上げた時に、軽い足音と共に涼しげな声が後ろからかかった。反射的に振り向くと、伝声の術を寄越した一人、青の魔術師オヴィスンだった。彫像のように整い、滅多に穏やかな表情を崩さない彼の、私と違い全く括らない腰までの長い青の髪が、主の少しの動きを彩るようにまさに小川の流れの如くさらさらと動く。それが彼の典雅な顔立ちに似合うのを認めるのは吝かではないのだが、…やはり全く縛らないのは邪魔ではないのだろうかと考えずにはいられない。

「お相伴には与あずかれますか」

「もとより、三人分で準備していましたからな」

「三人分？」

その形のいい眉宇が僅かに顰められ、訝しげな声が問おうとした内容は容易に想像がついて、さてどう答えようかと茶を注ぎながら思案していた刹那、激しい気の乱れが隣の部屋で感じ取れた。ここには四大魔術師しか入ることは出来ない以上、残る二人のどちらかと言えば同じく私に伝声の術を送ってきた緑の翁だと思うのだが、それにしては乱れが酷すぎる。オヴィスンもそう思ったようで、目で合図をして様子を見に行った。

一体何が……？

「み　　緑殿！？」

茶を注ぎ終えポットを置こうとした私の耳に、いつも穏やかなオヴィスンにはありえない程の慌てふためく声が聞こえてきた。

「儂は大事無い」

漸くといった風情で杖にしがみつくように立っていた緑の魔術師
ワルムワルドの顔色はどす黒く、目を白黒とさせていて、いつも泰
然としている緑の翁とはあまりに印象が違っていた。一体何事があ
ったのかと思いつながらとりあえず寝台のある隣の部屋に運んで寝か
せたり、気付け代わりに茶に酒を注いで飲ませたりと慌しくなつて
しまったのだが、それから多少の時間が経過し目の前に居る翁は、ま
だとてもそうは見えなくても平気だと言い張った。その割に
私を何処か恨みがましくも取れる目線で見るのは何故なのかと思
いながら、もう少し休んだ方がいいのではと勧めたが、彼は寝台から
足を下ろし座る姿勢に変え頑強に首を横に振る。

「自分の体調くらい自分がよう分かる。それよりもじゃ…おんし、
何をしておる？ 黒殿」

「何を…と仰せられますと？」

とぼけるつもりはなかったが、敢えてワルムワルドに尋ねれば、
違った方向から返事がきた。

「過日、死の平原^{エウルソフ・ラフ}の中心に邪悪なる膨大な魔力が出現しました。彼^か
の地は私の領域、様子を見る為に水鏡に映して見れば、不可思議な
ことに魔力はそのほんの僅かな時間に消失していました」

死の平原の中心。遙か昔に五英雄が魔神エウロを滅ぼした場所。
…成る程、確かにあの使いが言っていた通り、あそこから召還を掛
けたのか。

オヴィスンの言葉を引き取るように大分顔色の良くなったワルムワルドがなければ落ち着かないのか自らの杖の持ち手を握り締めながらも淡々と続ける。元々が小さい上に座っている翁とは、なかなか視線が合わない。

「そして、儂の領域に禍禍しき力が不意に現れた。青殿が感知したもので間違いはなからうと思うておる。その禍がどのようにして一瞬で移動したのかはともかく、それに儂らの一人が関わっているのは由々しき問題じゃ」

「…そして、黒殿は、それに接触したようですし」

「だから問うておる。何をしておる、と」

そつと添えるようなオヴィスンらしい言葉とは違い、ワルムワルドの常よりは些か低い渋い声音にため息にならない程度に浅く息を吐いた。二人がこちらに向ける視線に多少なりとも疑念が混じっているのは致し方ないだろう、彼らを感じたのはこの庵…シユノーゲンの魔力の中心地、『地脈の庵』で逢う必要性を感じたほど桁違いの魔力なのだ。そう、まるで、かの魔神を彷彿とさせるような。

しかし　やはり、そうか。

「その禍の転移に、関わっておりましたか」

『誰が』と聞かずに問うことが、それこそ醜悪な悪あがきだと内心自嘲しながらも確認せずにはいらなかったが、緑の翁は渋い顔のまま本来なら聞くまでもない応えをそれでも律儀に寄越した。

「己の領域の中じゃ、間違いようがあるまいて」

無様な様は見せるまいと、僅かに天を仰ぎ目に映る精緻な紋様を焼き付けるが如く見つめるに留める。

そうだろう。四大魔術師はこの世界の平穩を見守るもの。国家間の争い程度ならばともかく、こと魔力に関することであるならば

手出しをするかどうかはともかく わからぬことなどない
と言っている。己が領域ならば尚更だ。私がローデンに赴いて、結界を張ったことも言うまでもない。だから二人は聞いている。魔力の桁外れの量とその性状を考えれば役目上今この場になければおかしい、もう一人の白と、何か謀っているのかと。

……イスリーゼ。白の魔術師、我が娘よ。一体お前は、何をしている？

「時を、稼いでいるのです」

私は、ただそう真実を答えた。

12 (前書き)

お気に入り件数が10件！ ありがとうございます、これからも頑張ります(礼)。

感想等もいただけるととっても嬉しいです。

あの後は、穏やかなもんだった。

最初はまた何かあんのかなあって戦々恐々としたもんだったけど、結局ガルツアも来なかったし天気も少し荒れた日もあったけど大体は晴天続きで、洗面器と友達にはならなくて済んだ。

俺はガルツアが来た日の甲板掃除から、艦長室から出ては掃除とかロープの管理とか料理の味見とか、色んなところの手伝いさせてもらってた（ちよろちよろ邪魔してた、なのかなあ）。ご飯もみんなと食べるようになったし。

翌日から無口男のゼメキスは部屋に来ることもなくて、何処か別の部屋で寝てるらしかった。仕事とかもそつちでしてさぼくて殆ど顔を合わせることもない。それなら最初っからさつさとそうしてよ、とか思うんだけどさ。今は俺がこの船で一番広いらしい艦長室を独り占め状態。

……正直、あんまありがたくねえんだけどなあ。勿論ゼメキスにいて欲しいってんじゃない（ここ外せないポイント）、クルーですらないのに部屋独占しまってるって、状況がさ。ネレイドは『俺はお客様』って言ってたけど、みんなとバカ話しながらちよつとずつ聞いてみると、この船ってローデンの正規の軍船らしいんだよな（ローデンは基本的に内陸の国だから、船は少ないらしいけど）。しっかし、そんな軍人さんらが、何で俺をお客様扱いして国に連れて行くこうとするんだらう。考えてみたらえらい不思議。

異世界人が珍しいから見世物にしたいとか？（考えてげんなりした。勘弁してくれ）。

いやいや、現実的に考えようや俺。見世物にこんな丁重な扱いはしねえだろ。

でもそれならなんだろ…俺に何かさせたいとか？ でも寧ろこの世界の人間じゃないから知識かなり乏しいし出来ないことの方が多

いぞ。まあ、確かに俺には『壁』って力があるけど…、この世界には魔術師って存在がいるんだから、一般人には難しい大抵のことはそういう人がちゃちゃっとやってくれるんじゃないかねえの？

「魔術師にも律があるんですよ、トシオ」

船を降りて陸路初日。親しくなったクルーのみんなは船の維持管理があるからってことで残念だけど港で別れ、ゼメキスやネレイドを含めた数名の騎士と一緒に宿屋に入った。

なんだか急に回りに人が少なくなつたなあって思つたけど、聞いてみたらここはまだローデン王国じゃないらしく（そついやローデン王国って、地図で見ると翅の斑点みたいに小さい内陸の国だったんだよな）、他国の軍隊が大勢で動くのも目立つし国交上良くないだろうなあ、と納得。俺が逆にこの国（ヨハス王国、だっけ？）の権力者だつたら痛くない腹でも探られてんのかなって思うもん。状況にもよるんだろうけど、拘束されて拷問とか、下手すりゃ戦争？てなつてもおかしくないよな。

なんで、みんな町で見かけた一般人みたいな、っていうかそれより地味なアースカラーの服で、港町外れの清潔そうだけど目立たない感じの宿に移動になつたワケ。

俺は久々の新鮮な材料を使ったおいしい食事の後に、これまた久しぶりに揺れないベッドの感触を跳びはねつつ満喫してたんだけど、そんな時にお茶セットをトレイに乗つけてネレイドが部屋を訪れたもんだから、バツが悪いのなんの。けど折角だからってんで、それをえいやつと無視して優雅な夜のティータイムになつた。

ネレイドとゆっくり話すのも結構久しぶりかも、と思いつながら思つていた疑問をぶつけてみるとそんな答えが返ってきたんだ。

「リツ？」

「ええ。魔術師は人よりも多くの力があります。ですから、人に自

ら『力』で干渉することは律で制限されているんです。その魔術師の力が強ければ強いほど、その律には拘束力がありません」

あー、法律の律か。ネレイドの説明によっちゃつと漢字を当てはめて頷いた。

「例えば、我がローデンには宮廷魔術師が複数いますが、彼らの力はそれぞれ拮抗しています。ですからあまり律に縛られてはいけません。ですが、彼らを上回るような『色位』の魔術師は確実に律で縛られます。彼らを止められるものが人の側にいないからです」

なんでも、シュノーゲンは神の手を離れた世界で、其を見守り支えるのは人であり人ではない四大魔術師なんだそうな（神様や天使がたっぷりいるのが当たり前の俺からしたらそれでやってけんのかなあって思っちまうけど）。

この世界の人ってのは誰でもある程度の魔力を持つてるらしいんだけど、四大魔術師の創る理は魔力が強い人、えつとつまり魔術師として身を立ててる人により強く拘束力があるんだって。

それも破ろうと思えば破れる穴だらけの国の法律みたいんじゃない（逆にそんなに法律って穴ばつかなのかって思うけど）、例えば呪歌を歌おうとしたら声が出ない、みたいな律を犯そうとする魔術師の動きを制限しちまうもんじゃない。

「シヨクイって？ …あれ、じゃあガルツアは？ アイツ、宮廷魔術師なの？」

にわか講義に焼き菓子ほおばりながら頷いてたけど、また疑問がわいてきたから聞いてみた。ガルツア、ガシガシ雷とか出して干渉しまくってたよなあ。それが出来るってことは、宮廷魔術師レベルの魔術師（うわ、まわりくどっ）ってこと？

「名に色を冠することが許される魔術師を『色位の魔術師』と言います。『紫紺のガルツア』は『黒のシャイア』がない今、この世界でもっとも長寿の魔術師でしょうから、我が国の宮廷魔術師が束になっても太刀打ち出来ないでしょう。…今回の件は人に直接的害を与えたワケではないので、律の対象外でしょうが…どちらにしても『契約』をすれば話は別です」

ガルツアの名前を出したとき、ネレイドは深いため息をついた。ガルツアのこと、苦手なのかなあ。あの時の硬い表情を思い出しながら話を聞く。

えーっと…シェインは確か前に「魔力が高ければ高いほど長生き」って言ってたから…つまりガルツアの魔力は相当高いつてことか。…傍目からは全然長生きに見えなかったけどなあ、アイツ。寧ろ外見的にはゼメキスとかのが年寄りじゃん？ 眉間に皺とか出来てそうだし。って。

「『契約』？」

あの時ゼメキスとガルツアがそんなこと話してたような。そう思いながら冷め切る前にお茶を飲み干す。

この世界のお茶って、色は紅茶っぽいんだけど、味は緑茶っぽい雰囲気もするんだよなあ。でも、焼き菓子に合うしあんま渋くなくて好き。それを知ってるネレイドは、丁寧にもう一杯注いでくれる。ちゃんともこもこのカバーで保温されてる焼き物のポットからお湯が注がれるのを眺めながら、彼の手は剣士って聞いてもちよつと信じられないくらい、男にしては細めで繊細だよなあって思ったりした。うん、白桜あつちだったら『聖母』マドンナのみたいな 深窓の令息みたいな手。

でも、元の世界じゃ考えられない優雅なティータイムだ。あつち

じゃ、自販機の紙コップがせいぜいだったもんな、自分で淹れたりするのはさすがに面倒だし。

「ええ、代償は様々ですが『契約』することによって『色位』の魔術師を使役することが出来ます。それも律の一部なのですが」

「……じゃあ、ガルツアは誰かと『契約』してあの時ゼメキスに何かさせようとしてたってこと？」

「さあ…それは、ガルツア本人に聞いてみないと、分からないですね」

俺の質問に、ネレイドは初めて曖昧な笑みを見せた。確かに、それはそうなんだけどさ…そんな「どう言えばいいかなあっ」って笑みするほどでも、ねえと思うんだけど。

シェイン01

今日も、ざわざわするけどとってもいいお天気。

どうせライルもないし、この際だ、今日は目一杯掃除洗濯しようと思つて敷布まで寝台から引き剥がしてじゃぶじゃぶと洗つた。腕と腰が痛くなるけど、キレイになっていくのを見るとその疲れも飛ぶような気がするんだ。…正確に言えば、それにライルが気づいてくれれば、だけど。…まあ、そしてあまり気づいてはくれなかつたりもするんだけど（寧ろ気づいても何も言わない、かな）、それでも家の中が清潔であるのにこしたことないよね。

「おー、元気にしてたかシェイン」

こつそりと自分を励ましながら絞つた洗濯物を干していた僕に、快活そのものの声がかかる。幾度か瞬きをしながら声のした方角を見れば、片手を上げながら近づいてきたのはメオラ姉様だった。

「姉様。……………えーと…お久しぶりです？」

慌てて立ち上がり、前掛けで手を拭きながら僕の倍くらい大きな姉様を出迎えるけれど、どうも語尾が妙な感じになつてしまふ。この数十年、姉様がここに来るなんて『お祝いの日』…ライルの誕生日くらいしかなくて、前回の半年くらい前にもちゃんとして来たから、酷く驚いたのもあった。

「……………エスルさんと、何かあつたんですか？」

そつえば、一度だけこの女傑とも言われる姉様がやはり習慣を破つてこの島に里帰りをしたことを思い出して、その理由であつた

女性のことを聞いてみる。

「エスル？ 相変わらず所かまわずいちゃついては怒られてるぞ。親愛の情を示しているのにつれないと思わないか、シエイン。まあ、真っ赤な顔をして噛み付いてくるところが愛らしくてしょうがないんだが」

「……………相変わらずですね……………」

年に一度しか会わなくてもまるで変わらないその開けっぴろげさを始め、何処に突っ込んでいいのかわからなくて、そうぼそぼそと答えるしか僕に残された道はなかった。

「父上は何処に？」

姉様に洗濯物を干してもらう代わりに簡単な軽食を準備して、少し早めの休憩時間。窓から外を眺めれば真っ白な洗濯物が風を受けて大きくはらんで、本で見た帆船のようにも見える。きつと乾くのも早いだろうな。

そんなことを思っていると、褒めながらパンケーキを食べていた姉様がやっと人心地がついたのか二杯目のお茶を飲み終えてから改めて口を開いた。

「ライルでしたら『庵』からまだ帰ってきてませんかけど」

「庵というと……………『地脈の庵』か？ いつからだ？」

「昨日からです」

姉様の質問に僕は正直に答えた。姉様は傭兵をやっていて色んな国の思惑にも時には従わなければならぬ（度が過ぎれば断ること

も多々あるけど）から、本当ならばライルの立場上教えられることは極限られるけど、でも姉様は身内の欲目を抜いても信頼出来る人だし、まして『地脈の庵』はライル達四大魔術師以外は入ることはおろか場所さえ知らされないから（だから僕も大まかな場所しか感じ取れない）、絶対的に身は守られる。

そんな僕の答えに、姉様の表情が急に険しくなった。身を帯びる剣呑といつてもいい空気に、僕の胸のざわざわは否が応にも増してくる。

「…何があつたんですか？」

「『白』の地が荒れている」

きよとんとした。それは大事かもしれないけれど、姉様がこれほど表情を険しくする理由が　　少なくとも僕の言葉を聞いてそうなつた理由が分からない。

「私が色んな戦場に出向いているのは知っているだろう。最近、白の領域での戦闘が多すぎるんだ。まだイスリーゼが安定していないのかも思ったが、あの子が『白』を継いでから結構な年月がたっている。継承による不安定など今更ありえまい。……なのに、この十日ほどの気の乱れはおかしい。まるで『白』が不在なのかと思う程度だ」

「まさか」

「『庵』に行ったのならばまだ分かる。それにしても気が乱れてはいるが、まだ説明はつく。しかし父上が『庵』に行ったのがつい昨日というのならば、日数があまりにも合わず戦場では人が死に続けている。妹が十日もなにをしているのか父上ならば存じているのかもしれないが、『地脈の庵』に居るのならば連絡のつけようがない。…いや、そこにイスリーゼがいるという保証があればまだいい」

「メオラ姉様」

姉様の言葉が、脳髄に浸透するのに時間がかかる。まるで、理解することを拒否するかのよう。姉様は、僕の顔を見ながらもしゃべり続ける。

「『地脈の庵』は特殊な場所と聞く。それ故に四大魔術師の会合場所であり、単独で赴く地ではないのだと。ならばイスリーゼは、会合よりも以前に何故自分の領域から姿を消したのか、いや、そもそも父上達は何故会合を持ったのか。ひよつとすると……イスリーゼを喪い、新たな『白』を選定しているのではないか」
「そんな！ そんなことはありません！」

僕の発してしまった悲鳴のような声に、「そうだろうとは思う」と姉様は頷く。けれど、そんなあっさりと言われることじゃないのに！

ライルやイスリーゼ姉様達四大魔術師は、普通の魔術師とは違ってこの世界そのものとも言える存在。四分割された自分の領域をその魔力で満たし、支えている。姉様達に何かがあればその領域が揺らぎ、それは世界の崩壊にも直結するのに、絶対あつてはならないことなのに可能性とはいえそんなことを口にするだなんて。

ああ、でも。でも。なら何で僕の胸はこんなにざわざわしているんだろう。

今朝から空元気を出さなければいけないほど、何がこんなに不安なんだろう？

僕の顔は蒼白になっていたんだろう、メオラ姉様の表情が劣るような柔らかいものに変わった。

「いやまあ、斥候代わりというか、ちょっと気を回しただけなんだ。やっぱり似合わない役回りだったな」

「……いいえ、ありがとうございました」

予想したくもない姉妹の死を大胆に呟きながらも、矛盾なく『弟』に優しい視線を向けてくれる姉様に首を振る。その視線が、今は少し歯がゆい。

僕の外見は成長が遅い。成年になってから成長が止まった姉様達に比べても、まだ遅々として子供のまま。それでも僕はライルの弟子であり、育てられたものであり、やがては彼を継ぐ者なのだ。ライルがいつ帰るか分からない以上、僕は僕に出来ることをするべきだと、そう思う。

ダルーインを出たことがないから不安がないと言えはうそになるけれど、そんなことを言っている場合じゃないのもきつと確かだから。

「姉様、お願いがあるんです」

13 (前書き)

若干追加しました。大筋に変更はありません。

結局、そのまま菓子片手にシュノーゲン大陸プチ講義になった。俺の感覚だと街並みとか服装とかまんま中世って感じなんだけど、実際の暮らしは結構便利なんだなあって分かった。元の世界あっちで言うトコの掃除機とか冷蔵庫とかガスコンロみたいなモンがこっちにもあるのにまずびっくりだよ。

なんでも、そういう家事が楽になるような生活に密着した道具を魔道具（…道具の上に『魔』がついてるってことは、魔力が電気代わりになってるってコト、かな？　なんか微妙なネーミングだけど）、魔術師の補助になる杖だの水晶だのは魔法具って言って、どっちも魔術師の資格を持つてる人が作るモンらしい。あまり魔力が高くない魔術師の生業だったりすんだってさ。

で、作る職人魔術師が少ないから、そもそもが魔道具は割と高めの値段らしくて、高級なものになればなるほど庶民には手が届かないらしい。んー、つまりライルんちって貧乏だったのかも？　そんな感じもしなかったけど、あそこ魔道具の『ま』の字もなかったしなあ。

そんな感じで、ネレイドの教え方丁寧だし色々目新しい知識が増えて面白かったんだけど、最初に聞こうとしたこととずれてたな、と気づいたのは寝る寸前だった。

まあいいか、また聞く機会もあんだろ、と呑気に構えて寝たんだけどさ……かえすがえすも甘かった。

なんだこの揺れ具合。

いや、馬車だって聞いてはいた、うん。馬じゃないから内臓でん

ぐり返し気分にはならないんだろうなあって安心したもん。んで、昨日港町をちよつと歩いただけでも元の世界に比べたら道、よくねえなあって思ったのも確か。コンクリート舗装なんてやっぱないか、石畳だから結構揺れるんだろうなって。うん、『結構』くらいだったんだよ、今朝叩き起こされて乗らされた馬車が動き始めた時は、

町を抜けてそれぞれの町や村を繋いでる街道を走り出した途端、尋常じゃなく馬車が揺れだしたんだ。町中に比べて道の状態があんま良くないのかもしれないし、明らかにスピードは上がってるし、その両方のせいなんだろうと思う。

けどさ、とてもじゃねえけど「馬車で良かった」なんて安心できる代物じゃ、ねえぞこれっ！馬車には他に誰も居ないから文句も言えねえし、大体揺れすぎて何か言おうとしたらそのまま舌嚙んで目的地あの世に変更しそうだし。

だから馬車の中に横になって、流れて見える窓の外の景色を眺めながら酔いをごまかすのがせいぜいだった。ちつと、申し訳ねえけど誰か襲ってきたら馬車停まるかなあ、とか酔い最高潮の時は思ってたよ。後で反省したけど。

あー……もう限界……。

そんな調子で四日経った夜。久しぶりにベッドに仰向けでぐったりしてた。走り出して初日はベッドで寝られたけど、残り二日は野宿だったもんな……だから、そんな初体験は要らねえつつうのに。

頭ん中でネレイドから聞いたシュノーゲンのキマラ（蝶々大陸の左翅）の地理を思い浮かべてみると……うあ、まだ目的地のローデン王都まで半分近く残ってる。俺、絶対無事に到着できない気がしてきた。折角のベッドだっていうのに、まだ胃が軋む気がするし。

んだよ。

「ここから還れる還れないの件はなあ……まあ、いずれちゃんと考えないとだろうけど。今は自分が納得できることをするの優先した方がいいんじゃないかな。」

よし。

「こうと決まったらすぐ動くのが俺の長所（タミフルなんかは後先考えないって言ってたけど）。俺は「よしっ」と今度は声にも出して吐き気を気合いで押さえ、ベッドから降りた。善や急げとばかりに大股で歩いて扉を手前に思いっきり開いてそのまま勢いで隣の部屋に。」

「うえっ？」

「行こうとしたら…何かに衝突して目の前が真っ暗。何だなんかの罨？」

「一歩下がってみると一面ダークグレー。見上げると無口男、ゼメキスが立ってた。思わず変な声も出る。」

「…何をしている」

「いや、こっちの台詞だけ」

「人の部屋の前で何やってんだこいつ。聞き耳でも立ててた…割には堂々としてるよな。」

「騒いでいたのはお前だろう。何かあったか」

「淡々とした低い声と無表情に、一瞬説教でもされてんのかと思っただけど、…言ってることは多分…心配、してんのかひよっとして…？自分の解釈が微妙に信じられなくてもう一度表情をよく見直そうと一歩後ろに下がる。今の距離じゃ近すぎて却って見づらい。」

おい。なのになんで一步前に入るんだって。しょうがないから後ろにもう一步下がる。するとまた距離を詰めてきた。

「……っーか、何で前出てくんのアンタ」

同じこともう三回繰り返したら、何だか聞くのもバカバカしいなあ。っーか、マジで意味不明だこの米俵。

「招いていたのはお前だろう」

米俵男の意外な答えに、思わず周りを見回せば確かに扉から離れて既に部屋の中。…えーとつまり、俺が下がって室内に入れて意思表示したと思った？

「そんな解釈するのはお前くらいだっつっ!!」

うあ、ダメだ限界。体調無視して叫んだらめまいがしてきた。目の前に比喻でなく星が舞って、身体に力が入らない。床に倒れるかと思ったら、あったかい感触がして逆に身体が浮く感覚すらする。けど、まだ目の前がチカチカしてよく見えない。

「… っ」

誰か、多分ゼメキスが何かを言ってるけど、聞き取れない。アイツ、ただでさえ言ってることワケわかんないのに欠片だけなら最早理解不能だって。そう思っていると背中シートにシートの感触がして、ベッドに横になったんだなって分かった。離れようとする気配を感じて、視界不良のまま手を伸ばしたらどうにか何処かを掴めたらしい布地の感触。

「聞きたいこと、あんだから治るまでちょっと待ってる」

人の出鼻を挫いたのはそっちなんだから責任とりやがれ。

ゼメキス05

無事上陸を果たし、後は陸路のみだった。

日程は予定通りに消化しているが、一刻も早く着かねばと気ばかりが焦る。

この焦燥が部下に伝わりはしないかと危ぶみながらも、精一杯やってくれているだろうサウム達や陛下の容体が案じられ、またその間ギゼル又殿下が何かしでかしてやいないかと、別な心配も湧きあがってしまったえば当然浅い眠りの日が続いた。筆頭騎士としていつでも泰然としなければならぬと自分に言い聞かせているのに、中々思うようにはいかない。

港町を出発して四日目の夜。少年の疲労が目に見えているとのネレイドの進言もあり、宿屋に泊ることにした。勿論、豪華な宿ではなく日ごろ使っているような、気取りや詮索とは縁がない所をだ。ここはまだヨハスとロウリンズの国境付近、万が一にも目立ってはならない。出来れば、このまま野宿を続けるのが一番良いのだが、少年の体調を慮ればしよがあるまい。

それが良いことかどうかは分からないが。

宿に着いてから、自力で立つのがやっとという有様の少年の肩を支え、二階の角部屋へと連れて行った。自分の部屋は用心の為隣を確保しておく。酒場も兼ねているらしい一階からは、地元の住人が殆どを占めているらしい面々が、酒を呑んで賑やかに騒ぐ声が聞こえてくる。我々がさほど階下の彼らの目に触れていないのは気配で分かったが、油断は禁物だ。

「あゝーっっっ！ 止め止め！ 辛気臭えぞ俺っ！」

外套を脱ぎ捨て身軽な格好で埃を落とし、改めて帯剣し終えた時元気など欠片もなかった筈の隣の部屋の少年から大声が聞こえてく

る。切羽詰まったものは感じられなかったが、念の為部屋に大股で向かいはしたが、中に入るべきか扉の前でらしくもなく逡巡し

その間に、前をまるで見ていない当人が扉を引き開け、俺とぶつかる羽目になった。

「うえっ？」

さほどの勢いではなかったのだろう、倒れることもなく少年は一步下がって俺を認識し　　良く分からない奇声をあげた。まだ顔色は悪いが、部屋に連れてきた時よりは血色が良くなっているのを室内の明かりで確認すれば、何故か安堵する。

「何をしている」

「いや、こっちの台詞だけど」

尋ねてみれば、不思議そうな顔で逆に聞き返してくる。腑に落ちなかったがもう一度問いを重ねれば、何故か少年は一步下がった。中に入れという意味かと思い、一歩進んだが、ネレイドから聞いている彼なら、口頭でその意を告げるだろうに。だがどちらにしても、とりあえずは室内に戻ってもらった方がいい。その身の安全と、体調の為にも。

「……っーか、何で前出てくんのアンタ」

ただ、そう告げることに躊躇してしまい、少年が後ずさりするよ
うに歩いていけば、寝台のほど近くまで辿り着いていた彼が投げや
りにも見える態度で聞いてきた。自覚はなかったが、思い返してみ
れば確かに奇妙な光景だったろうから、聞きたくなるのも無理はな
い。

「招いていたのはお前だろう」

手持ちの理由にうまいのがなかったとは言え、あまりいい答えではなかったのは確かだった。少年は言葉が理解出来ないような顔をしてから（突拍子もなかったからだろう）、また大声で叫び……体力の限界だったのか、くらりと大きくその体を傾がせた。近い距離だったのが幸いだった。倒れる前に彼を支え、抱き上げることが出来て内心胸を撫で下ろす。

「…… すまん」

謝罪の言葉が、ひとりでに漏れた。少年に聞こえたかどうかは定かではないが、聞こえなくともいいと思う。寧ろ、聞こえてはいけない気すらした。

上掛けがうまくはだけられていた寝台の上に少年を横たえて、上から掛け直す。ぐったりとしたその様子に、彼に強いている無理を今更ながらに感じる。俺よりは、懐いているネレイドがついていた方がいいだろうと、扉に向かおうとしたら服の袖をくいと引かれた。

「聞きたいこと、あんだから治るまでちょっと待ってる」

引きはがすことは簡単だったが、その言葉に縫い止められたように動けなくなってしまうと途方に暮れた。

「ゼメキス様？」

そのまま手に届く場所に椅子もなく、下手に動いて眠りについた少年を起こすにも忍びなく、扉すら閉めることが出来ずに立ちっぱなしになっていた背後から、ネレイドの声がした。さほど大きな声ではなかったが、首を巡らせ空いている掌で唇に指を一本当てる。

一度小さく頷いた彼は足音を殺してこちらに近寄り、殊更に声を殺して囁いてきた。

「食事が出来ておりますが…少し後にした方がよろしいですね」

「そうだな」

「……代わりましょうか？」

そつと尋ねてきた副官に、黙って掴まれた袖を示した。それで意図が通じたのだろう、少しだけ苦笑いを浮かべて首肯を返してくる。その見慣れた笑みが、今は少しだけ重く見えてしまうのは、俺の中にある棘のせいだろうか。

その後、椅子を運ぶのも断った俺の指示を他の部下に知らせる為、きちんと扉を閉めて出て行ったネレイドの姿を、僅かな角度の視線だけで追ってから、少年に向き直った。

健康的な寝息を立ててぐっすりと眠りこんでいる姿は多少年齢よりは大柄ではあるものの、稚^{いとけな}い^いとしかいいようがない。顔立ちや肌の色が違うのは、こことは異なる世界に属しているかららしいと聞いてはいたが、その性情はあくまでまっすぐな、直情的とも言える少年のものにしか思えなかった。

確かに、特異な力を持つているのだろうとは思う。職務上魔術師と接する機会も多いが、あの銀の光は今まで見たどんな魔術とも違っ^つて見えた。…だが、確かにライル殿の推挙であろうとも、この少年でなければならぬ理由などあるのだろうか、そんな疑問が頭をもたげる。

サウム達や殿下、陛下が心配な気持ちに偽りは無い。魔術に頼りたくはないが、転移の術を使えばと何度思ったかしれやしない。だからこそ、その為ならと事情は承知しているだろうに、少年が逃げられないよう、余計なことを考えさせないよう、到着直前まで彼の体調など無視して無謀とも言える速度で城へ向っていたのだ。

私はローデンに忠誠を誓っている身だ、国の体面ならいざ知らず

己のそれなどどうでもいい。ローデン国民ではないこの少年に恨まれようが憎まれようが、『妖あやかし』さえどうにかなるのならば。

なのはどうして 彼を刺激しない為だけではない、温かくも冷たくも相対出来ない無様な自分がいるのだろうか。

つ、つまりひょっとして。

「えーと……俺の言葉にバカ正直に待ってたワケ……？」

ゼメキスは無言だった。…多分それは否定じゃないってことだよな。しかも部屋には椅子もあるんだからせめて座ってりゃいいのに、でくのぼうみたいに立ったまんまで。あーもー…何処ノ忠犬デスカアンタハ。いや、忠義を尽くされる覚えは欠片もねえけど。

「慣れてるからな」

「それはこんな無体な状況に？ それとも立ちっぱなしに？」

「両方だ」

「……わーるかったな」

思わず眉間を寄せて睨み上げると、「いや」なんて短い否定の言葉だけ言って無口男は窓際にあるテーブルに大股で歩いてく。一挙手一投足が優雅なネレイドほどじゃないけど、雑な動作には見えななんだよなー。……米俵扱いいつもされてる身としちゃ、イマイチ納得できねえが。

「起きられるなら来い。食事が来てる」

テーブルに視線を向けると、パンと一緒に何枚か皿が置いてある。寝たせいか食欲もちつと出てきたみてえだし、食べないと持たないよな、と俺は一回頷いてベッドから降りてそっちに向かう。…うん、もうめまいはしない感じた。ま、元々さっきのもこの目の前の男のせいみたいなもんだけどさ。

「いったただつきまーす」

手を合わせて挨拶してから料理を食べ始める。ラッキーにもこの習慣はこの世界でも通用してるんだ、じゃないと俺ちよっと息苦しかったかも。いや、いきなりずーっとお祈りとかされたらしんどいし、挨拶も何もなしにいきなり食べ始めるってたらだらっぽいじゃん。こっ、始めと終わりは短くきちっとしてないとき。

そう思いながら今日の料理を眺める。歯ごたえのあるどっしりとしたパンと、豆と野菜を煮込んだスープ。それに川魚を揚げたのだこれ、この地方の特産らしくてよく出るんだよ。

そうそう、食事に関しても助かってるっちゃ助かってるんだ。いや、三食タダで食わしてもらってるんだからありがたいのは勿論だけど、そう、その『三食食べる』って習慣にしたって一緒だったしさ、出される料理だって桜花おうがに近いのもあったし、見たことないものも多かったけどそれはそれで美味しかった。うん、俺って、この世界の人と味覚は同じだなって感じたもん。それって大事じゃねえ？ 海外旅行じゃないんだから、梅干持参ってワケにもいかねえしさ。

…しかし、うーん、揚げ魚は食べられるかなあ……。胃の調子と相談しよう。しかし、目の前のゼメキスは手を合わせる挨拶だけはやったけど、後は無言で食べ進めてる。おい、お前には食事を楽しもうっていう気持ちはないのか。

「……何を聞きたい」

食後の余韻も何もなく、なぜか俺にお茶を淹れさせてから（味の保障は一切しねえからな！）ゼメキスはそう切り出してきた。それまで「お茶」以外一切無言だよ。気詰まりしないで結局完食したのが我ながら不思議な食事風景だったよ。えーい、お前は「風呂・メシ・寝る」しか言わない何処のダメ亭主だ！ ……ちよっとまで、

その流れだと俺が嫁になっってしまう。今のナシだ、ナシ。
ていうか、あれ。

「なあ、アンタって嫁いんの」

「何だそれは」

「嫁、妻、伴侶、奥さん。家の中のこととしてニコニコしながらアンタの帰りをご飯作って待っていてくれる人」

こんなヤツについていける女性っていんのかなあ、と思考の流れでつるつとしてしまった質問に、無然とした表情でゼメキスが答えたもんだから嫁って言葉はないのかと思って畳み掛けるようにして似たような言葉を挙げてみる。

「家を取り仕切ってる執事ならいるが」

「……なあ、それ天然？ それともワザとボケてる？」

「聞きたいことはそれだけか」

明らかにずれてることを真顔のまま言うもんだから脱力しながら尋ねると、無口男にはそれには答えずに食器を重ね始める。おい、ワザとボケたんなら全然笑えねーぞ。

「ちっげえよ！ ……あのなあ、どうして俺がローデンに連れてかれるかつ、て…。」

壁際に立てかけてあったトレイをテーブルに置き、食器を乗せるゼメキスに尋ねようとした声が、途中で止まる。その手には、今はめた白い手袋。…ネレイドに渡しておいた、ガルツアから貰ったそれが、脳裏に浮かぶ。

「ライル殿から聞いてないのか」

「……ああ、うん。なあ、それってあの時の手袋？」

ゼメキスが何か言ったけど、視線が手袋に行っていた俺は生返事して質問を重ねる。それが『サービス』って言ってた白手袋なら何がどうサービスなんだろうか、魔法とかかかってたりすのかな。俺の視線に気づいたのか、ゼメキスは視線を手袋に向けてからヤツには珍しく露骨に深々とため息をついた。

「なんだよ」

「何も聞いてない割に呑気だな」

「……って、言っていないのはそっちだろうが！」

何だその呆れたようなため息は！ 理不尽に連れてきたのはそっちだろうっ！

ガルツァ02(前書き)

若干の残酷表現があります。苦手な方はご注意ください。

ガルツァ02

「あ、出来なかったから」

相手から指定された期日時刻、場所にしっかりと到着、そして報告。それは信条にしないとねえ。内容も結論からズバツと言うのは僕なりの誠意なんだけど、あんまり伝わった例ためしがない。不思議だよねー。

「……な、何故だ！ 対価にはきちんと応じた筈！」

呆然としてから慌てて詰め寄ってくる依頼者の中年男。この間と違って丸っきりの素で、魔術師である僕に詰め寄ってくる。それがなーんか、妙に必死に見えてくるのは気のせいじゃないよねえ。やつぱり、ここで 今居るのは前と同じヴァータル帝国にある魔術師の召喚所だけど こそこそ話してた不快な魔術師と関係あるんだろうな。普通、弟子は師匠の命令は絶対遂行だし。

そもそも、妙に時期が一緒だった上、僕みたいな、一般的には『安い』対価の魔術師ってそうそういないし、しかも指示が同じ『人攫い』じゃあ…ねえ？ 偶然の一致だって主張する方が難しいよ。まあ、その師匠と弟子が同じ召喚所を使ってるっていうのが、後ろ暗いコトをする割には迂闊だなあって思うけど。

「だって、『命令』されちゃったんだもん」

「 貴様、いや、貴殿は命令されれば誰にでも従うのか!？」

あつけらかんと言った僕に、中年男は今度こそ絶句した後になんて叫んだ。呼び方に本音が透けてるぞ、って突っ込むのは優しい僕は止めておく。

それよりも、あんまりこの人魔術師の常識に詳しくないんだなあって実感。本当に普通の庶民なら当たり前なのかもしれないけど、この男の裏にいる（と決めつけちゃうけど）あの魔術師の底もしれたもんだなあって思わずにいられない。

師匠が弟子の鑑なら、師匠を鑑とした弟子もまた、師匠の鏡：指導の成果みたいなものだよね？ この男が魔術師の常識も知らないのって、それだけこの男へのぞんざいな扱いが透けて見えるって感じ。

面倒だなー、このまま消えてもいいんだけどなー。ロイスにお仕事は丁寧について言われてるしなあ。とはいえ、こんな後始末までするんなら追加料金でも欲しいかも。別にお金とってないけど。

「あのねえ、ローデンの軍艦から人攫えって言うてる割に調べが足りないよね。あ、船体やら旗にあそこの紋章（リボン）翻ってたんだから、『ローデンなんかじゃない』って言い訳しないでね。

…あそこって特殊でさ、五英雄の血筋が残ってる唯一の国なんだよ。そのせいもあって昔からの盟約として、あそこの筆頭騎士は僕たち色位（しよくい）の魔術師に『命令』することが出来るんだよね。それは彼らに不利な『契約』の破棄も可能っていうことくらい、僕らを使役出来るってコトなんだけど」

最初笑顔で牽制してから、とりあえずざっくりと枝葉削り取って大本だけ説明して「わかった？」と顔を覗き込む。

「しかも、こここのところ……というか、殆ど全部ローデンでこき使われてる色位の魔術師って僕で、その僕にローデンの船から人を攫えってというのは、前提条件がちょっと無茶だよな。こーんな風に失敗しちゃうの目に見えてるし？ まあ、筆頭騎士が居ないと踏んだのかもしれないけど」

これ見よがしに、何も持っていない腕を広げて失敗したのだと見せつける。実際は『命令』なんかされちゃいないけどね。でもまあ、ゼメキスの手の甲さえ確認出来なければ問題は無いし。

そういえば、あの子は何者だったのかなあ。明らかに『氣』が異質だったし、あの僕を弾いた力興味あるな。

「あ。ということだから、『契約』は破棄されたけどこっちに不備はないから対価の回収は効かないからね」

そんなことを考えながらも、説明終了とばかりに術陣じゆじんに移動しかけていた僕がふと気まぐれを起こしたのは、男が足元に縋りついてきたせいじゃなく（そんなことよくあるし）、その蒼白になって小刻みに震えている様子だった。

「どうか！ どうかもう一度お願いします！ このままでは私は『くれない紅』様に……！！」

今までとは打って変わって必死だった中年男。けど、全てを言い終える前に言葉を失くした。

言葉つていうか命を失くした。

聞こえたのは、耳障りな意味をなさない絶叫。浴びたのは真っ赤な、この男の命の源。

おや。なるほど、この男は捨て駒だったのか。それじゃあ、何にも知らされてなくて当然か。ごめんね。

一步後ろに退いて、もう息をしていない男を見下ろし納得。小首を傾げてちょこつとだけ心の中で謝罪。それからこの男の身体を、恐らくは予め掛けていたんだらう風刃ふうじんで切り裂いた本人が転移の術陣から現れる気配を感じれば、振り向いて文句をつけてみた。

「ちょっとー。僕の服血まみれにしないでくれる？」

「これは失礼を致しました」

術陣から空間を渡って姿を現したのは、見事に赤い髪をした魔術師。『紅』……ね。顔は悪くないのかもしれないけど、そののっぺり具合が爬虫類を連想させて僕にはやな感じ。あ、本物の爬虫類は嫌いじゃないんだけどね。それが人から連想されるとどうにもこうにも肌に合わないんだ、昔っから。

「ですが、『紫紺のガルツア』様ならば結界も即座に張れると思っただものですから」

「なーに、自分の不手際を僕のせいにするワケ？　じゃ、その不躺な発言はこれで帳消しにしてあげるよ」

床に横たわっていた物言わぬ男の身体の上に手を緩く翳す。短く整えた呼吸一つ、すぐ近くにいる紅男に手出しをさせる間は置かない。まあ、僕がこんなに無造作に術が使えるとは思ってなかったみたいで、あっさりと邪魔なく物言わない身体は視界から消えた。

紅の魔術師が驚いたような表情をしたのは一瞬で、そんなに動揺した様子もなかった。それくらいは予想の範囲内ってコトかな。

「あの男からは何も出はしませんよ。何も知らぬただの小金持ちです」

「それを判断するのは君じゃないよ」

もう死体はないとはいえ、血なまぐさい匂いがこもってる部屋の中でなーに穏やかな顔してるんだらうかね、この男。とはいえ、僕の返事だって似たような調子ではあったけど。

「どうでしょう、新たに私と『契約』してただけませんか」

「ローデンへの干渉は僕には不向きだと思っけど？」

いかにも食わせ物っぽい取り繕ったの見え見えの笑顔には、眉一つあげただけ。

「『命令』が出来るのは一度と聞きますが？ それを抜きにしても、紫紺のガルツア様とは手を結びたいのですよ、対価ならば今度は私が応じます故」

「『契約』を盾に飼い殺しにでもする気かな……。あのね、君も調査不足。確かに僕の対価は『僕のロイスを利用しないコト』。それを誓えるのであれば誰にでも結べるモノではあるけど」

血まみれの姿を晒すように胸をはり、ニツと笑う。

「僕のロイスと、人殺しをするような輩とは『契約』しないって約束してるんだよね」

それ以降、僕の手は一切死んだ血にまみれたことはない。僕自身は人の死に何の感慨も持たないけど、ロイスが哀しむことをするつもりは一切ないんだから。

理解が遅れたような表情の紅の魔術師にもう興味はなくて、僕は彼が乗ったままの術陣を無視してそのまま転移した。

「これはただの手袋だ」

俺がいなかのようには振舞って、食器の重ねられたトレイを持って出て行ったムカツキ無口米俵野郎が、何故かもう一度トレイを持ってやってきたのは時間的には五分もたつてなかったと思う。俺好みの歯ざわりサクサクの軽い焼き菓子と替えの紅茶ポットが乗つた。そこから何故かまた散発的に飲み食い開始。勿論、サーブはゼメキスにさせたよ、決まってるんだろ。それがまたネレイドの淹れてくれたのと同じくらい美味いからまた微妙に腹立つなあ、もう。

体調が悪かったのに、うまいせいか紅茶の効用かお菓子もさほど苦しくもなくおいしくいただいでる中、さっぱりコイツの腹が読めなくて、俺は、無表情のまんま紅茶飲んでたヤツをやぶ睨みしてた。

「はあ？」

「手袋自体に意味はない」

いきなりされた発言に、顎を出して我ながら間抜けな声を出せば、淡々と返事が来る。…コイツ絶対嫁いないな。この唐突さに外見が良くてもすぐフラれるってば絶対。何でネレイドとかついていけんのかなあ、思い返せば船のクルーもみんな好意的だったし、ネレイド以外の騎士の皆もきびきびと従ってるし。世界が違つと価値観も違つのか？俺ならこんな上司絶対嫌だ。

けど、手袋に意味がない？意味がないならなんでガルツアはくれたんだろ。否定しなかつたんだから、多分今紅茶飲みながらはめっぱなしの手袋（外せよ）は『あの』手袋ってことだろ？

「お前をローデンに連れて行く理由だが、ライル殿の助言があったからだ」

「……ライル？」

手袋について突っ込もうとしていた俺に、ゼメキスはまた淡々と起伏なく言葉を紡ぐ。コイツ、絶対説明ベタ。家庭教師のバイトと出来ないタイプだぞ、大体一人で勝手に話し出すな！ こっちの話も聞けーっ。そう叫びたかったけど、まさかライルの名前が出てくるとは思わなかったから大人しく話を聞くことにした。それにローデンに行く理由の方が、俺にとっちゃ切実だ。

「今、ローデンに起こっている災いを鎮めるのにはお前が最適だと………災い？」

オウム返しになったのに他意なんかない。ただ、焼き菓子をいっぺんに口に放り込み過ぎてうまく喋れなかっただけっーか。なんで、紅茶を自分で注いで別のポットに入れてあるお湯で割る。……う、入れ過ぎたかも。ちょっと薄い。

やっぱり俺ってこういうのに向いてないなあと思いつつながら紅茶でさっぱりした口を開く。

「でもさ、俺ってモノ知らずだし、魔術師の方がいいんじゃないかねえの？ それこそライルとか、ガルツアとか」

「ライル殿がお前を推挙した。どうやら『妖し』あやかしは魔術師とは違う系統の力を揮うらしい」

ということとは、最初はライルを頼ったってことかな。そりゃそうだろうな、こんな海のものとも山のものともつかない俺よりは縊りようがあるよ、うん。……しかし、ライルって本当に高名な魔術師だったんだ。シェインの身びいきかと思っただ時もあっただけだ。

「……なあ、じゃあ今はどうしてんのその、えーと…アヤカシ？
ほったらかしにしてるワケじゃねえんだろ？」

俺を連れてくるのにどうして仮にも国の筆頭騎士がワザワザ来たのはわかんねえけど、災いと言われるほどのモノが暴れてるならこんな旅をしている場合じゃない気がするんだよ。それなら、せめて何らかの手段を講じてるんだろうなって思って聞いてみた。

「宮廷魔術師全員で結界を張っている。… ライル殿がダルーインからご助力下さっているが、お前が着くまでとの制約付きだ」

そう告げたゼメキスの声は、心地よいけれど間違いなく今までどおりの平板なものだった。

なのに、どうして俺にはそれがわかったんだろう。…いいや違う、分かるに決まってる。瞳に浮かぶ煩悶、唇の端が引き締まる、その元が無表情なだけに僅かに動くだけで却って知れちまう。

そうして、俺はそんなゼメキスの顔を見て 唐突に、理解した。

初対面の時に挨拶もそこそこで俺を連れ出したのも、シェインが見えなくなってから馬を走らせまくったのも、船だつてきつと急いで、船を下りてからも陸路を俺の酔いが抜けないほど駆け抜けて野宿までしていたのも。

助力があつてもきつと疲弊している国の魔術師のため、妖しに怯える国の人々のために急いでいたんだと。そうして、今も休まなければもたないと承知の上で少しでも早く向かうことは出来ないかときつと思ってる。

それは俺にとってはあまりにも覚えがある感情。なのに出てきたのは、それと正反対の言葉だった。

「なあ、もし俺が協力したくないって言ったら、どうすんの」

沈黙は、驚くほど短かった。まるで、答えを準備してたみたいに。

「別の手段を探す」

「……俺に、無理やりその役目をさせるんじゃないやねえんだ？」

押し出すようにからかうような声を出したつもりだけど、さっきから真つ直ぐに俺を見ていたゼメキスが不意に不思議なほど目元を和らがせたせいで見事に失敗した。

「お前に、無理強いさせるつもりはない。これは、ローデンの問題だ」

もつともだった。そもそも俺に関係ないことで起こった出来事で、俺に行く場所がないからって強制させることは出来ないし「怖い」って逃げ出す選択肢だってあるんだ。今まで話さなかったのは、それを危惧していたからかもしれない。そういう意味じゃ、今のゼメキスの発言はズルイ。そもそもローデンの問題だと言うなら、俺を連れてこなくてもいいんだしさ。俺が『最適』ってことは、最適じゃなくても、他にどうにかできる手段があるってことでもあるんだから。

それでも、……なーんでわかんのかなあ…それきり沈黙したままのコイツの眼は嘘だって、言っていないんだよな。俺が嫌だって言ったら、アンタは俺を放り出して、本気で次の手段を探しに走るんだろ？ それに、俺が拒否したんなら、コイツが次を見つけるまでまたローデンの人に色んな負担が増えるのは間違いないねえ。

そんなら、答えは決まってる。

なあ、ゼメキス。

国を思って、人を思って動き続けるアンタの気持ちってさ。

「行くよ、アンの気持ちは、俺にだって分かるから」

それは、俺にとっては理解できる感情なんだ。

15 (後書き)

大変お待たせいたしました(平伏)。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6420/>

ちょっとまで。

2010年11月4日09時42分発行